

第2章 亀山構内教育学部附属山口中学校污水排水管布設に伴う発掘調査

1 調査の経過

附属山口中学校敷地ではこれまで散発的な調査に終始しており、本格的な埋蔵文化財の調査が行われるのは今回が初めてである。その契機となったのは公共下水道への切替工事で、教育学部附属山口学校の所在する亀山構内では先に附属幼稚園・小学校敷地で発掘調査を行っている。附属山口中学校敷地でも同事業計画に呼応して、埋設管路内の埋蔵文化財の有無を把握するため昭和61年度に試掘調査を実施した²⁾。その結果、2m×2mを基本として設定したトレンチ8ヶ所のうち、敷地の南西部にあたるグラウンド以西の3ヶ所で遺物が出土した。特に、校舎西側の白石小学校間のトレンチ（第5トレンチ）では、庄内併行期および縄文時代後・晩期の遺物包含層が検出され、附属山口中学校敷地が埋蔵文化財包蔵地であることが周知されるに至った。他の5ヶ所のトレンチでは構内造成土の直下に黄褐色系のシルト質の地山を確認したが、遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。

試掘調査の結果を受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、遺物包含層および遺物が分布する地域を中心に、污水排水管の埋設に先立ち事前に発掘調査の必要があると判断した。当初、調査は遺物包含層の分布が第5トレンチと校舎を挟んで対峙する、第2トレンチでは認められないことから、校舎周囲を「コ」の字に巡る第2トレンチ以西の路線について行う予定であった。その後、昭和63年度の屋内消火栓設備改修に伴う立会調査³⁾で、試掘調査時には遺物が出土していなかった中庭部分から土師器、磁器などが出土したことから、新たに調査対象地域に加えることとなった。なお、試掘調査で遺物が全く認められなかったトレンチ周辺の路線は、調査結果および現況の地形などから後世の削平によって埋蔵文化財の分布する可能性が薄いと判断されたため、工事施工時に改めて立会調査を実施することとした。

最終的な調査区は、新規の埋設管路内にある既設の集水桝や地下埋設物によって分断され、校舎南西部のA～C区、グラウン

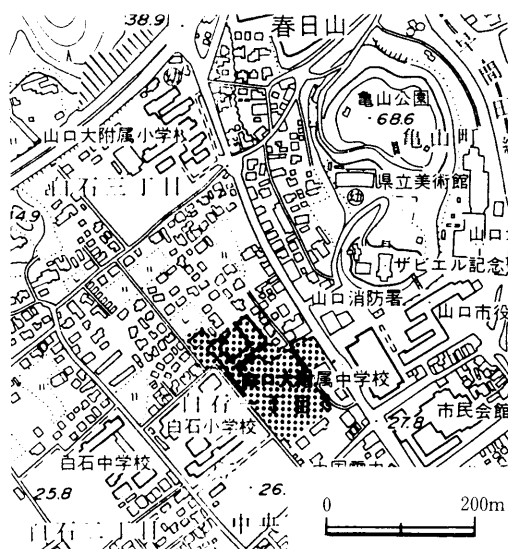


Fig. 4 調査区位置図

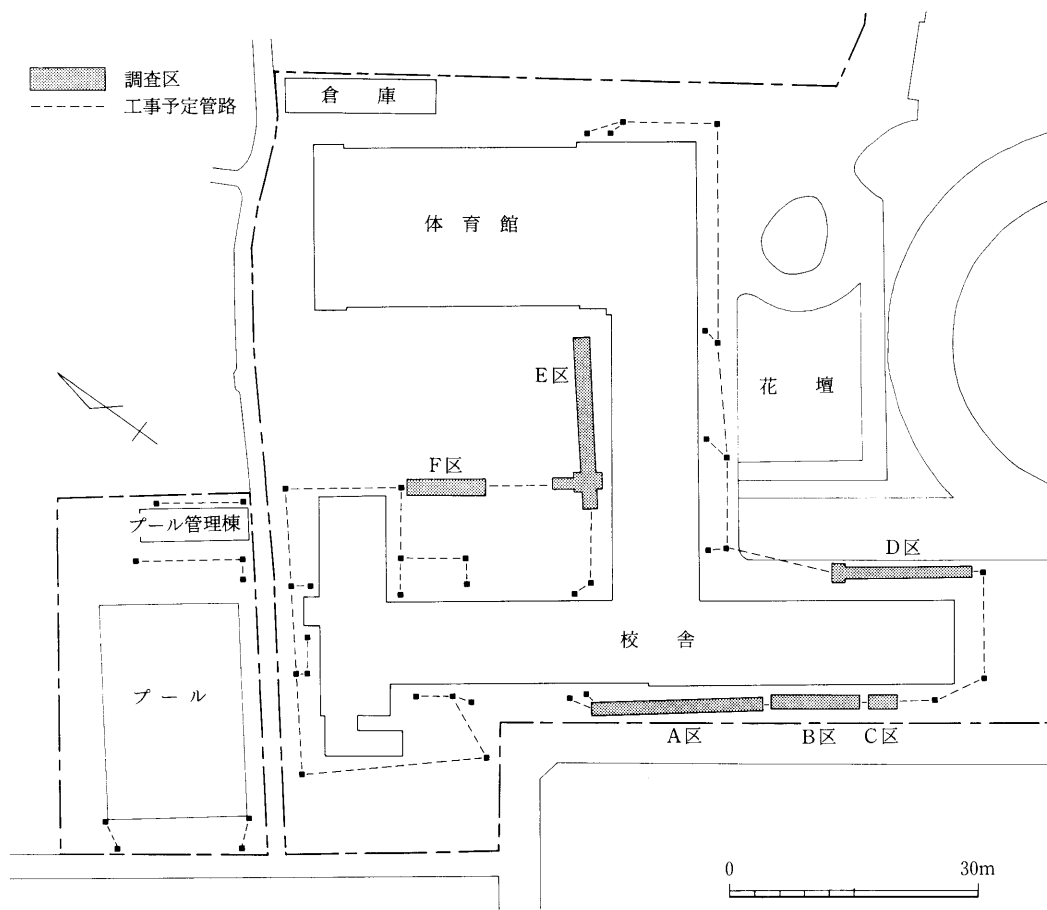


Fig. 5 調査区設定図

ド側のD区、中庭のF・E区の計6か所となった。調査期間は平成2年8月1日から9月28日までで、調査総面積は約70㎡であった。

2 層位 (Fig. 6, PL. 2 (3))

A区

校舎南西部に設定した調査区。現地表面には厚さ8cmのアスファルトが敷設されている。埋め土は約30~40cmと薄く、その下位には客土である平均層厚約10cmの第4層：黄褐色粘質土が部分的に残存する。試掘調査では、弥生土器、土師器、須恵器を包含することが確かめられているが、本調査区では遺物は出土していない。第4層の下位には試掘調査時に検出した庄内併行期の遺物包含層が堆積する。包含層は第5層：黒褐色粘質土、第6層：黒褐色シルト、第7a層：黒褐色礫の三層に分層され、各層ともほぼ水平堆積している。

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

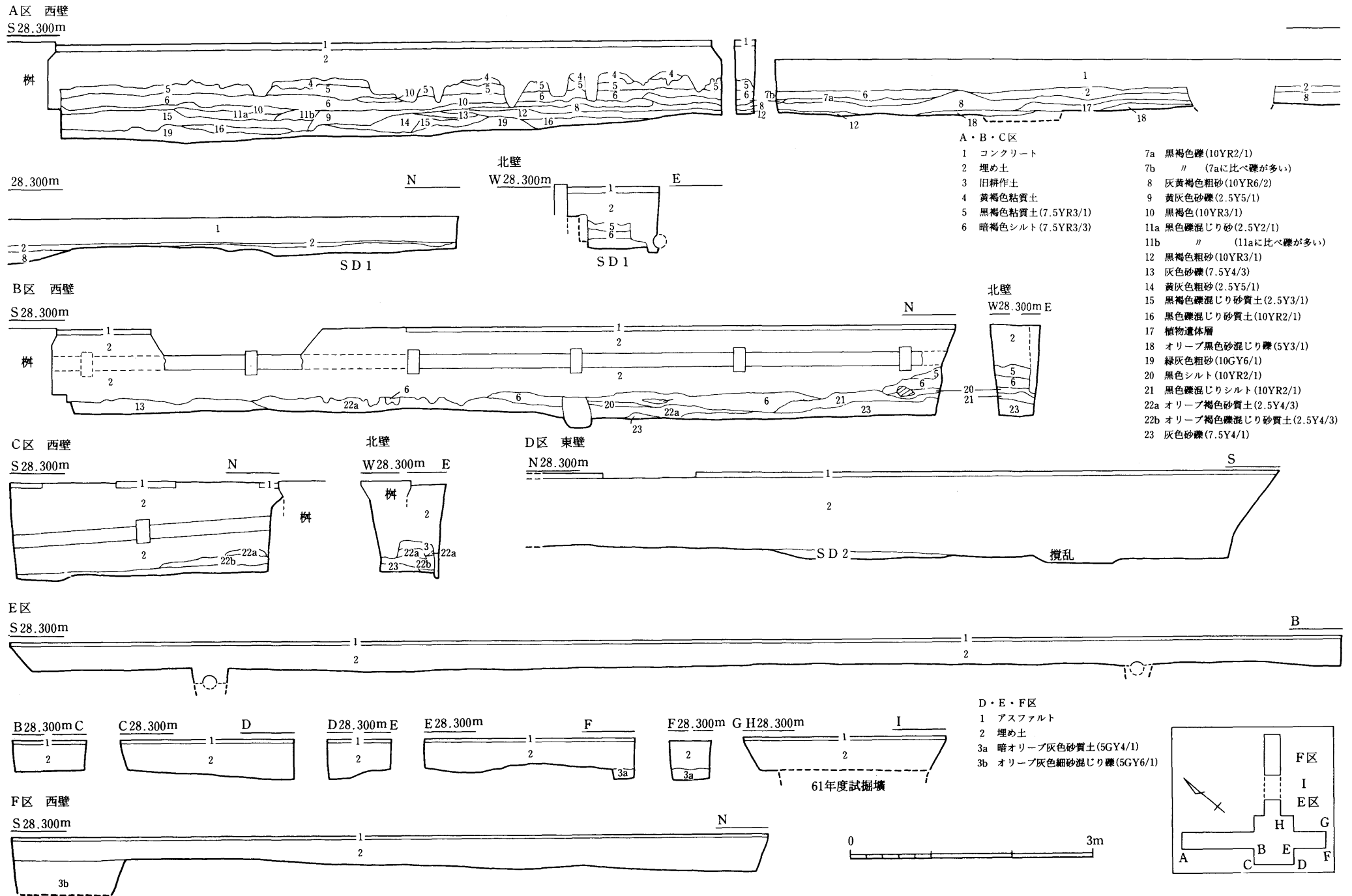


Fig. 6 土層断面図

層位

各包含層とも層厚は約10cmであるが、遺物の包含量は最上位の第5層が最も多く、最下位の第7a層は上位二層に比べて極端に少ない。層位的には分層されるが、後述するように各層から出土する弥生土器は大きな時期差はなく、第5層と第6層との接合資料が存在することなどからも極めて近接した時期のもので、一型式の範疇に収まるものと理解できる。また、畿内系、山陰系、在地系など出自の異なる土器系統で構成されており、在地の土器文化圏への外来要素の展開課程を知る上で注目される。第7a層の下位には数層に分層される縄文時代晩期後半～終末の遺物包含層がブロック状に堆積する。包含層の最下層は第15層：黒褐色礫混じり砂質土で、無遺物層を介在して地山に達する。地山は、北端部が黄褐色礫混じり粘質土、以南がグライ度の高い緑灰色礫で、その色調・組成が大きく異なり、縄文時代の遺物包含層は、調査区北端部付近から次第に南へ下降する地山の落ち込み部分に堆積している。遺構は調査区北端部のやや高まりのある平坦部分から、弥生時代終末～庄内併行期の溝状遺構1条を検出した。

B区

A区の南側に位置する調査区。埋め土は最大で約80cmの層厚をもち、その下位の堆積層には弥生土器、土師器を包含するが、量的にはA区に比べて少ない。既設の埋設管による削平、攪乱が著しく、特に、A区に堆積が認められる第5層は北端部に残存するにすぎない。第6層は最大層厚約25cmでA区に比べ層厚を増すが、その分布は北半部に限定される。その下位にはA区では検出されなかった庄内併行期の遺物を含む層厚各約10cmの第20層：黒色シルト、第21層：黒色礫混じりシルトが北端部に堆積する。その下にはA区同様、第22a層：オリーブ褐色礫混じり砂質土、第23層：灰色砂礫の縄文時代晩期後半～終末の遺物包含層が堆積し、緑灰色砂礫の地山に至る。後世の削平に起因して、南半部では埋め土の直下が縄文時代の遺物包含層である。

C区

B区の南側に位置する調査区。埋め土は層厚約70～100cmにわたり厚く客土されており、北端部ではその下位に旧耕作土が残存する。旧耕作土下には主として弥生土器、土師器などを包含する第22b層：オリーブ褐色礫混じり砂質土が堆積するが、室町時代の遺物が混在しており、周辺からの二次堆積層である。その下位には基本的にB区南半部同様、縄文時代の遺物包含層である第23層：灰色砂礫が堆積し、緑灰色砂礫の地山に至る。

D区

グラウンド側に設定した調査区。現地表面には厚さ6cmのアスファルトが敷設されてお

り、その下位に埋め土が層厚約80～100cmにわたって厚く客土されている。埋め土の直下はグライ度の高いオリブ灰色系の地山で、溝状遺構1条を検出した。出土遺物が小片で、量的にも極めて少ないため時期はわからない。

E区

中庭に設定した調査区。現地表面には厚さ4cmのアスファルトが敷設されており、その下位に層厚約30～40cmの埋め土が客土されている。埋め土の直下がD区同様グライ度の高いオリブ灰色系の地山あるが、東半部では細砂混じりの礫、西半部では砂質土で構成されており、粒度、組成が一樣でない。河川の氾濫などに起因する堆積物と考えられる。遺構は検出されなかった。出土遺物には、埋め土内からの縄文土器、弥生土器、土師器若干がある。

F区

E区の北側に設定した調査区で、地山に至る層順、埋め土の堆積厚はE区と大差ない。地山を構成する堆積層は、E区東半部と同一のオリブ灰色系の細砂混じりの礫で、最上位の検出面から約25cm下位で湧水する。遺構、遺物とも認められなかった。

3 遺構

溝状遺構

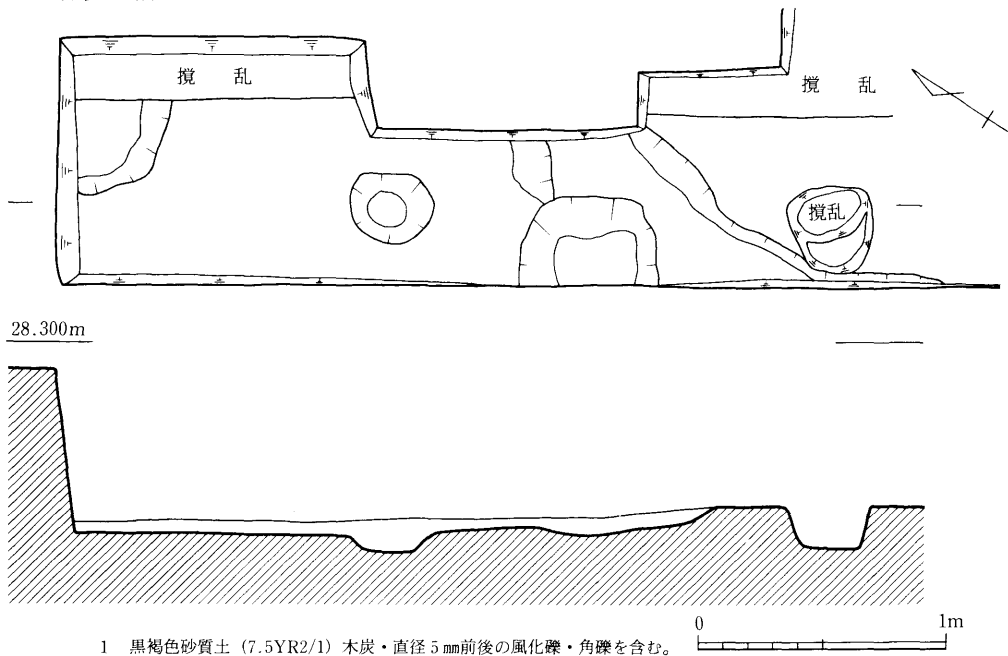


Fig. 7 第1号溝状遺構実測図

溝状遺構・A区第5層出土遺物

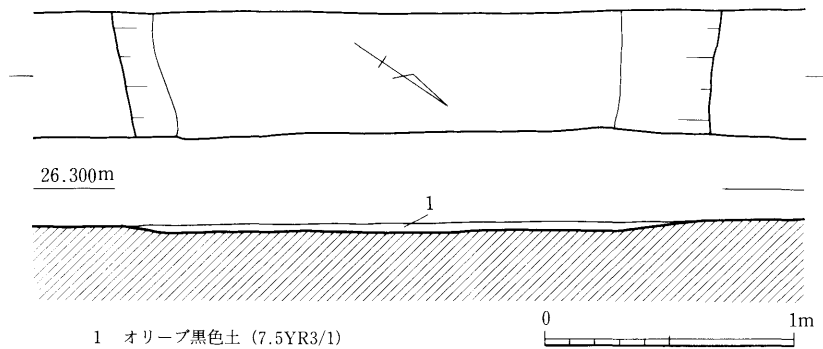


Fig. 8 第2号溝状遺構実測図

第1号溝状遺構 (Fig. 7, PL. 3)

A区の北端部に位置し、調査区内を北-南に走行する。溝の西肩部は調査区外にあたるため検出していないが、上面幅2m以上の規模が想定される。溝の東側壁面は階段状に二段にわたって下降しており、検出面からの深さは平均5~7cm、調査区北壁付近の最深部で約10cmである。断面形は浅い皿状を呈し、内部には平面円形状の3か所の落込みが存在する。検出面の標高は約27.6m。埋積土は黒色砂質土(7.5YR2/1)で、弥生土器の小片約20点が出土した。溝検出面の直上層(第6層)の出土遺物の下限が庄内段階であること、また出土遺物中に後期終末を遡る弥生土器が出土していないことなどから、弥生時代後期終末~庄内段階の溝と考えられる。

第2号溝状遺構 (Fig. 8, PL. 6 (2)(3))

D区南端から北へ約3.4mの地点で北側の肩部を検出した。調査区内を北東-南西に走行し、上面幅約2.4mの規模をもつ。断面形は浅い皿状を呈し、後世の削平によって検出面からの深さは約5cmを残すにすぎない。検出面の標高は約26.2mで、埋積土はオリーブ黒色土(7.5YR3/1)である。土師器の小片約7点が出土したが、時期は明かでない。

4 出土遺物

土器

A区第5層 (Fig. 9~13, PL. 8~11・17)

縄文土器の甕または深鉢、弥生土器の壺・甕・鉢・高坏・器台、土師器の壺・甕・高坏・器台・ミニチュア土器が出土した。

縄文土器 (1~6)

1~6は晩期の粗製の土器。1は器形不明。器壁はやや薄く、内面に条痕風擦過を、外面に刷毛を同一工具で施したと考えられる。2・3・6は甕または深鉢。2は内面に板状

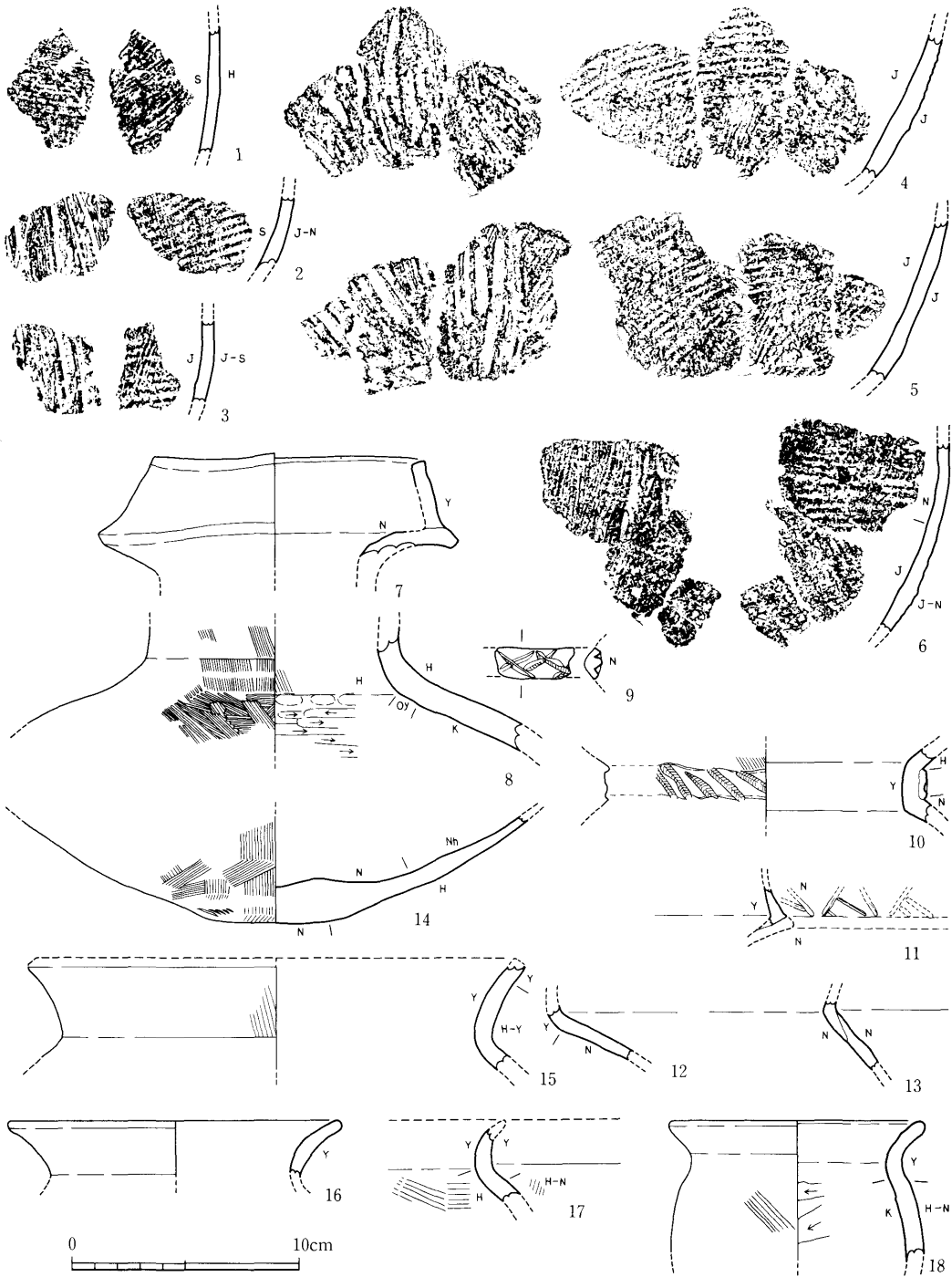


Fig. 9 A区第5層出土遺物実測図(1)

溝状遺構・A区第5層出土遺物

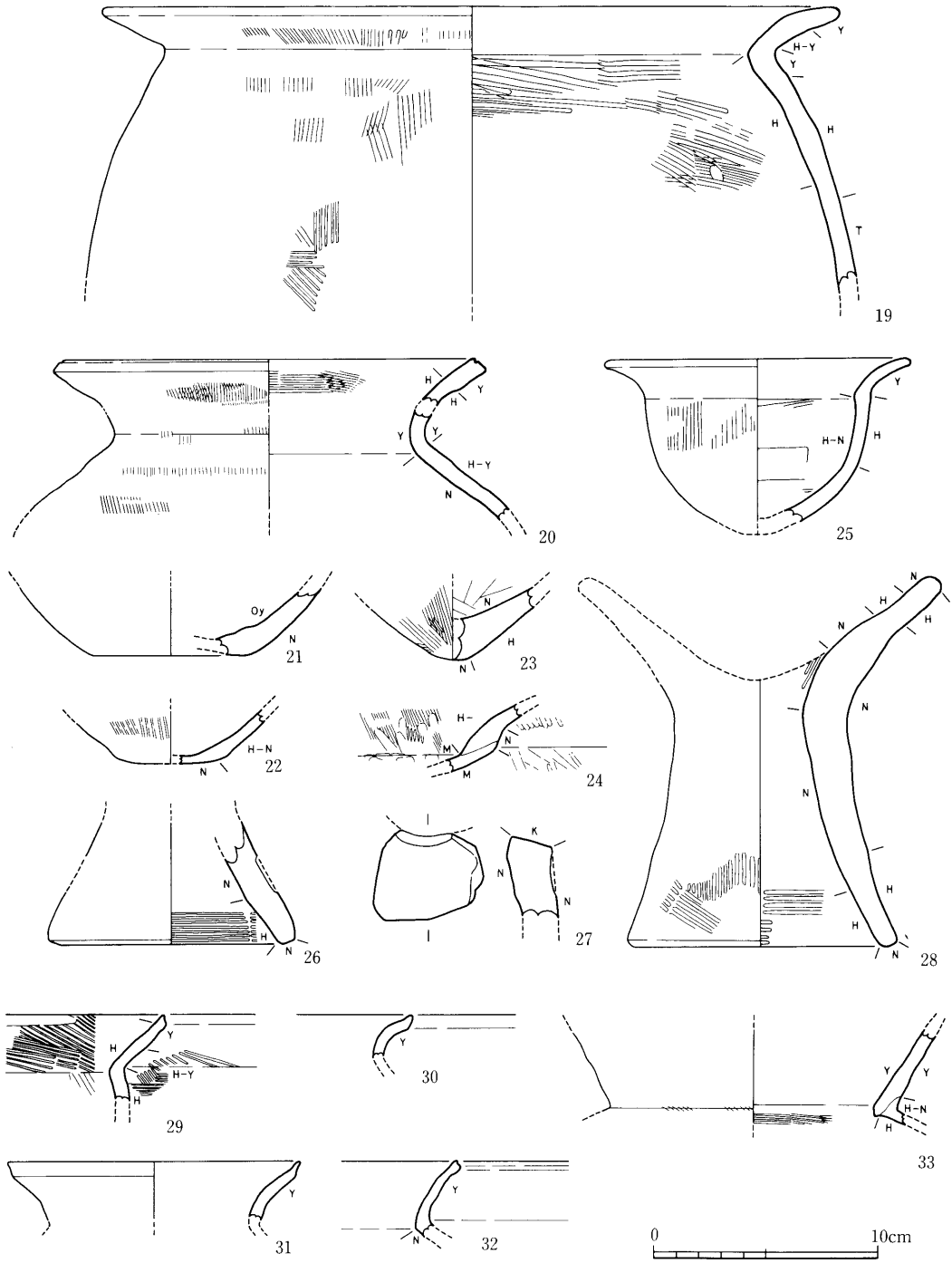


Fig. 10 A区第5層出土遺物実測図(2)

工具による縦方向の条痕風擦過が施され、外面は横方向の貝殻条痕のちナデ。3は内面に縦方向の貝殻条痕、外面に横方向の貝殻条痕のち右上がりの刷毛風擦過が施される。6はやや器壁が薄い。内面上部はナデ、下部は縦方向の細かい条痕、外面は貝殻条痕のちナデを施す。4・5は深鉢の底部付近と思われる。4は内面に縦方向の貝殻条痕、外面上部に横方向の貝殻条痕、下部に右上がりの斜めの貝殻条痕が施される。5は4と同一個体の可能性がある。内面には、下から上への貝殻条痕が、外面には横のち縦の2回の貝殻条痕が施される。

弥生土器（7～28）

7～14は壺。7・8はひずみが著しく、接合せず頸部径も異なるが同一個体と思われる。器壁がやや厚い。上段の口縁の長い複合口縁で、鏝状の部分がわずかに下垂する。端部は面をもち内傾する。9は剥離した頸部の突帯。接合面は丁寧にナデられ、擬口縁を呈す。刷毛状工具で格子状の深い刻みがつけられる。10は頸部に突帯を貼りつける。頸部は短く、突帯の幅分でおわる。突帯には、単位13本の刷毛状工具により左上がりの刻み目がつけられる。刻み目の間隔は均等ではなく、また角度にばらつきがある。11は複合口縁の内傾する口縁上部。下部は接合時の擬口縁となる。器壁が薄い。外面の文様はへら描きで下向きの鋸歯文の間に2本の左上がりの直線を刻む。12・13は頸部～胴上部。13は成形時の粘土帯の継ぎ目が明瞭にわかる。14は大型の壺の底部。わずかに平底の痕跡を残し、器壁が厚い。外面の刷毛はつんだ目と、粗い目の2種類がある。外面には煤が、内面には炭化物が付着している。

15～23は甕。15は口縁端部が斜め外方に面をもつ。頸部内面は、ゆるくカーブし稜が不明瞭。16は口縁がゆるく外反し、端部は肥厚して丸い。17は口縁端部を欠く。頸部はゆるくカーブして稜をもたない。外面の一部に、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。18は器壁が厚く、口縁端部は肥厚して丸い。内面のケズリは主に右から左になされ、雑で大きくえぐれている部分もある。頸部はゆるくカーブして稜をもたない。19は大型の甕。器壁が厚く、口縁頸部の屈曲が強い。口縁端部は丸い。外面は頸部に強い横ナデを、胴中央にタタキを施す。外面に部分的に煤が付着する。20は口縁がやや長く、端部が肥厚し、凹線の巡る面を斜め外方にもつ。凹線は爪または細い工具によってつけられ、全周はしないとされる。刷毛は細かく、口縁内面の刷毛は廉状文風に短い単位を左から右へ重ねていく。21は上げ底気味の底部。内面の指押えは雑になされる。22は痕跡的な平底となり、底部は薄く仕上げられる。外面の刷毛は1単位5本で目が粗く間隔にばらつきがみられる。外面

A区第5層出土遺物

に煤が、内面に炭化物が厚く付着する。23は尖り気味の底部。内面のナデは、皮状の素材を使いごく細かい痕がつく。1単位は1.2cm幅。外面の刷毛は目が粗く、下から上へなされる。

24は高坏。坏の屈曲部付近。内面は粗・細2種類の刷毛が使われ、接合部はヘラで押さえる。外面のヘラナデはミガキの後に施すが、やや雑で一部削り状の痕跡となる。

25は鉢。底部を欠くが、痕跡的な平底になると思われる。外面の刷毛は1単位が1.8cmの幅広だが、風化が進み本数の確認はできない。

26～28は器台。26は基部で、内端面が接地する。内面の刷毛は粗い。27は受部で、上面はケズリで成形する。受け部と裾部が同角度で開き、全面の上から $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ を切り取る。28は器壁が厚く、器面の凹凸が大きい。上端部はヘラナデされたようにやや角張り、下端部は丸い。最小径付近には、シボリ目が残る。左右に大きな2枚の翼状突起、前方にやや小さい1枚の突起がつくと思われる。

土師器 (29～86)

33は壺。口縁は長く伸びるが、上部を欠損する。頸部で胴と口縁を接合し、接合時の粘土の盛り上がりが見られる。

29～32は甕。口縁端部が上方につまみ上げられる。29は刷毛の目が粗く強く押し付けられる。30は口縁が外反し、端部はやや丸い。31は内外面とも横ナデのち部分的に直交するナデを施す。32は端部が肥厚し、外側に面をもち中央に沈線が巡る。

34～41は甕。頸部が緩くカーブを描き、明瞭な稜をもたない。34は胴内面上部にほとんど調整がなされず、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。粘土帯の幅は狭い。胴内面中央部に板状工具によるケズリが施され、刷毛目同様の木目痕がつく。外面には丁寧なヘラナデを施す。35は口が大きく開き、端部は肥厚し丸い。36は器壁がやや薄く、口縁端部内面が角張る。外面に部分的に煤が付着する。37は口縁が短い。内面の調整は、部分によりヘラでミガキ風にもナデ風にも仕上げる。外面にヘラ状工具の痕がついた部分がある。38は胴内面に粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。外面のナデは丁寧。39は風化が進むが、口縁内外面横ナデ、胴内面ケズリと思われる。40は口縁端部がやや尖る。41は胴内面に粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。頸部～口縁の横ナデは丁寧に施される。

42～44は口縁が直線的に外傾し、端部が尖る甕の口縁。42は内面に短い刷毛を重ねて調整する。43は端部から0.5cm下で内面が薄くなる。44は外面に強めのナデを施す。45～50は端部が丸い甕の口縁。34～41のいずれかと同一個体かもしれない。45は器壁が厚く、外面

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

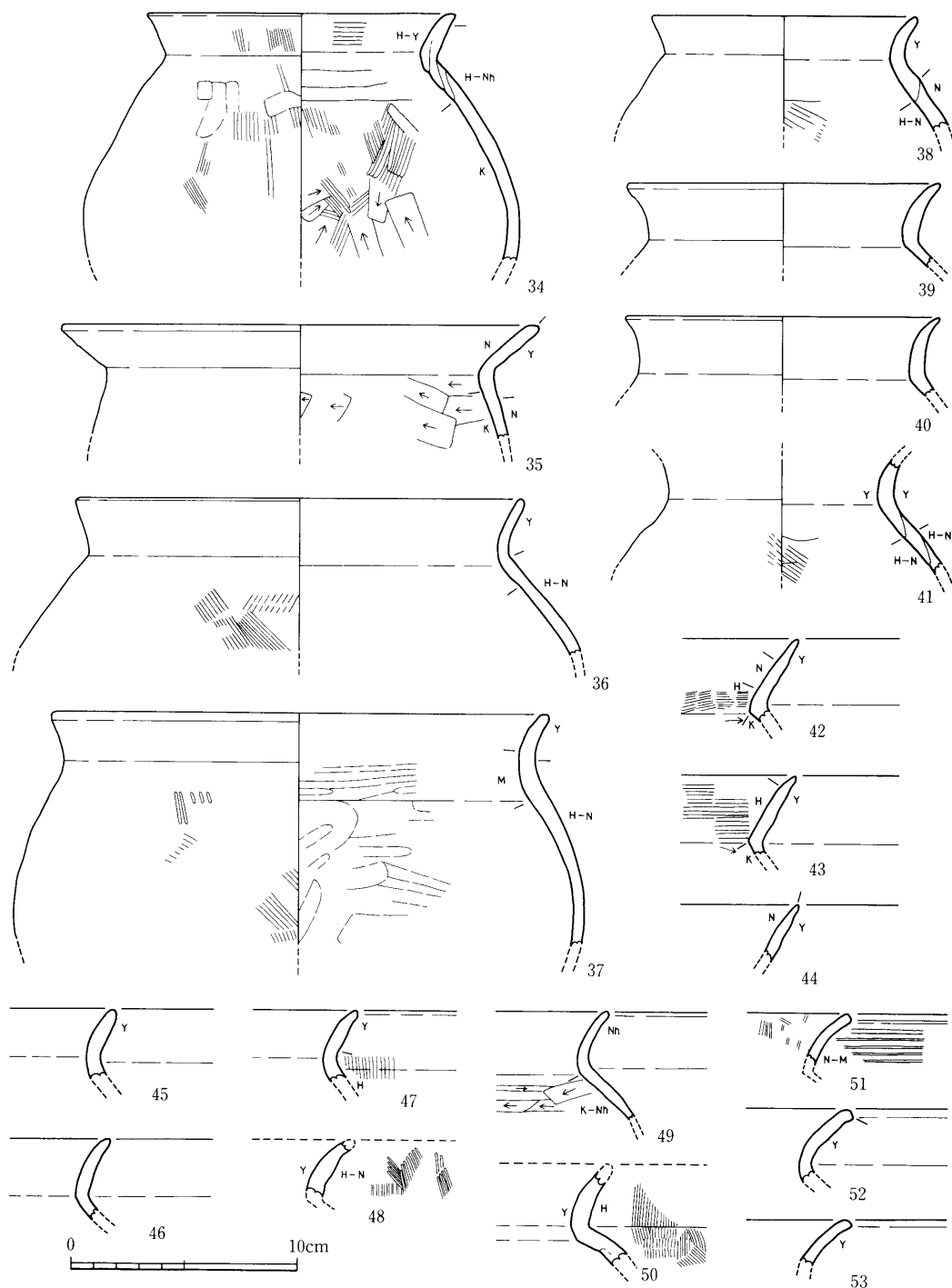


Fig. 11 A区第5層出土遺物実測図(3)

A区第5層出土遺物

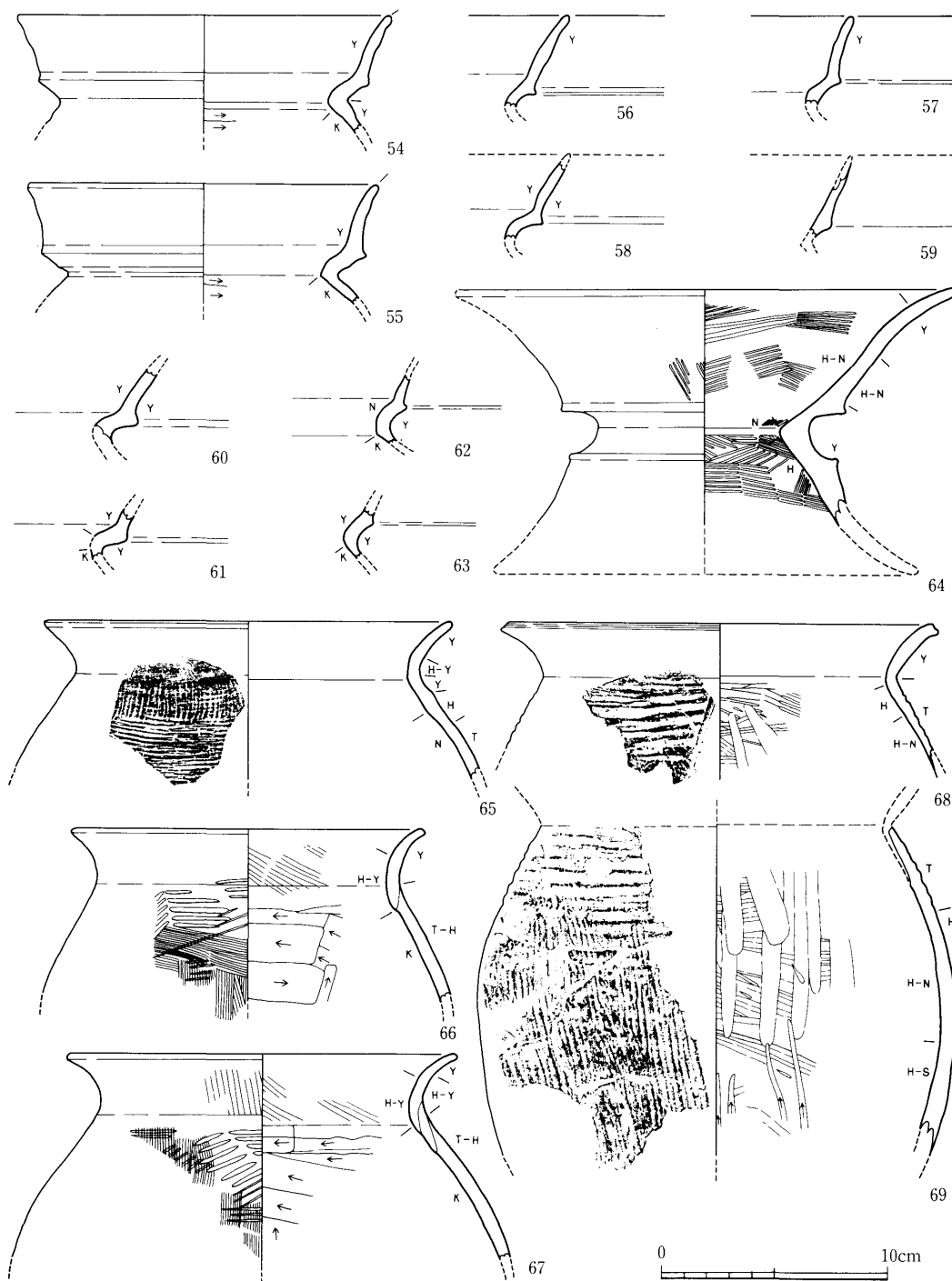


Fig. 12 A区第5層出土遺物実測図(4)

に煤が付着する。47の外面の刷毛はナデ残されたと思われる。48は外面に1単位7本の刷毛を下から上へ施す。49は器壁が薄い。胴内面は凸凹が大きく、低いところはケズリの面のまま残り、高いところだけヘラナデされる。51～53は斜め外方に面をもつ甕の口縁。51は端部の面の両角をヘラで押さえて面取りをする。端部中央は、押さえた際に両側が盛り上がる。内面は縦に外面は横に部分的にミガキを施す。52は外面を黒色にいぶす。

54～63は山陰系の複合口縁の甕。いずれも外面が黒くいぶされた結果煤が付着して、煮沸容器として使われたことを物語る。54は頸部上の稜がやや丸い。55は頸部上の稜が尖り、突出する。56は口縁が長く伸び、頸部上の稜を強くつまみ出す。57は頸部上の稜を上下からつまみ出す。58は頸部上の稜を強くつまみ出す。胎土は目はそろろうが、全体に粗い。59は山陰系土器と思われるが、著しい風化ではっきりしない。60は頸部上の稜を丸く幅広につくり出す。63は頸部上の稜を細く強く上下からつまみ出す。

64は山陰系の鼓形器台。くびれの上下の稜を強く引き出すが、くびれ側は平で外側が窪む。上下の稜の間はやや狭い。刷毛は1本が細いものと幅広のものと2種類が使われ、外面は一部ナデ残される。

65～69は外面にタタキを残す庄内系の甕。65は頸部のくびれが明確ではない。口縁端部は面取りをする。細かいタタキが水平方向になされた後、刷毛、ナデの順に調整が行われる。口縁から胴部にかけて、部分的に煤が付着する。66も頸部のくびれが明瞭ではない。胴内面には、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。口縁端部はわずかに肥厚する。外面調整は、幅広のタタキ、細いタタキ、刷毛の順に施され、細いタタキの部分には刷毛目が交差する。67は頸部のくびれが明瞭ではない。口縁は薄くなり、端部は斜め上方に面をもつ。胴部内面には、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。頸部の粘土帯の幅は狭い。外面のタタキは、幅広のものと細いものがあり、細いタタキの部分には刷毛目が交差する。68・69は接合はしなかったが同一個体と思われる。器壁は薄く仕上げられ、口縁端部は肥厚する。端部は斜め上方に面をもち、浅い凹線が2本巡る。内面の調整は横方向に強めの刷毛調整を行ったのち上部は下から上へナデ、更に下部は下から上へ細いヘラ状の工具で搔き上げる。ヘラ状工具の痕は胴上半部にもわずかに認められる。外面は、上部が幅広のタタキ、そののち縦に刷毛を施す。外面は全面を黒くいぶしている。

70は布留系の甕と思われる。口縁端部は外面に面をもつ。刷毛は1単位6本。外面に煤が付着する。他にも布留系の土器と考えられるものもあるが、細片のため決定できない。

A区第5層出土遺物

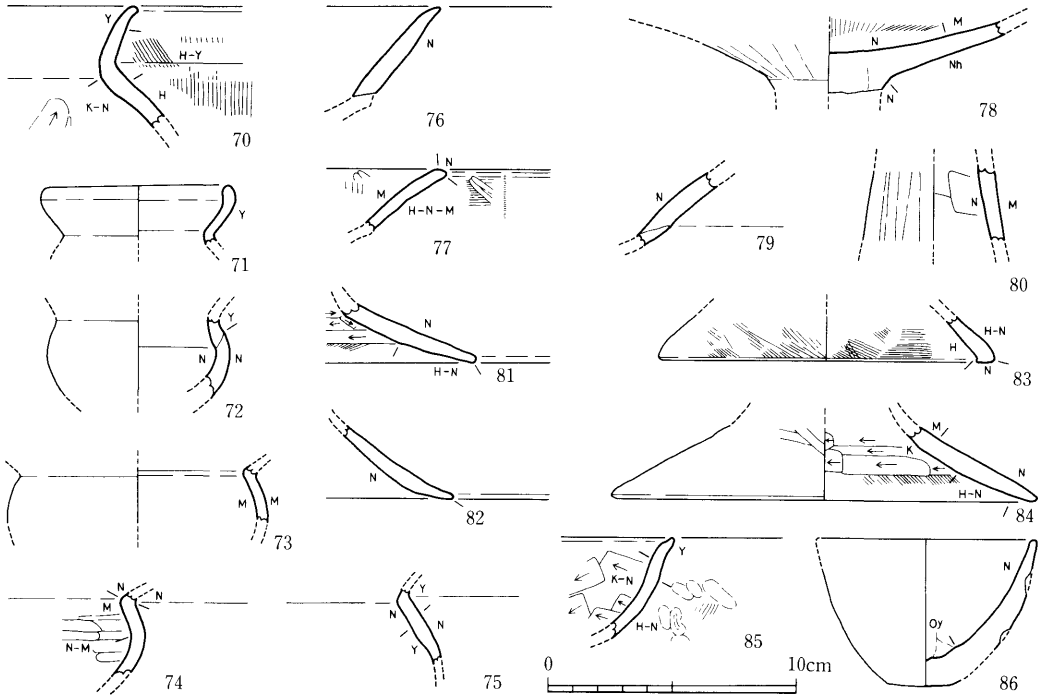


Fig. 13 A区第5層出土遺物実測図(5)

71～75は小形丸底土器と考えられる。71は口縁が内反して外傾し、端部は丸く肥厚する。72は胴上部で粘土帯を接合し、内面に盛り上がる。73は器壁が薄い。内外面ともきわめて丁寧なミガキで単位はわからない。74は下部に部分的に煤が付着する。

76～84は高坏。76～79は坏部。76は下部が擬口縁をなす。直線的に伸び、端部で急に細くなる。77はわずかに外反し、端部はやや肥厚する。外面調整は、横刷毛、ナデ、ミガキの順に行い、刷毛は左から右へ施し、終点に工具端部の細かい痕がつく。78は脚上部に粘土を充填している。脚と坏の接合ははっきりとしないが、脚の周囲に坏を貼りつけたと考えられる。79は粘土帯の継ぎ目が明瞭で剝離しかけている。80は脚柱部。内面のナデは、皮状の素材を使い1.7cm幅でなされる。外面のミガキは縦に丁寧に施される。81～84は脚裾部。81は器壁が厚く、端部はやや角張る。刷毛は1単位10本。82は端部がゆるく外反する。83は端部がゆるく内弯し、内側に小さくつまみ出す。84は器壁が厚く、端部はやや尖る。

85は碗あるいは台付鉢の口縁。体部はゆるく内弯して立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸く上方につまみ出す。外面のナデは指の痕が目だつ。

86は手捏のミニチュア土器の鉢。口縁端部はやや尖る。

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

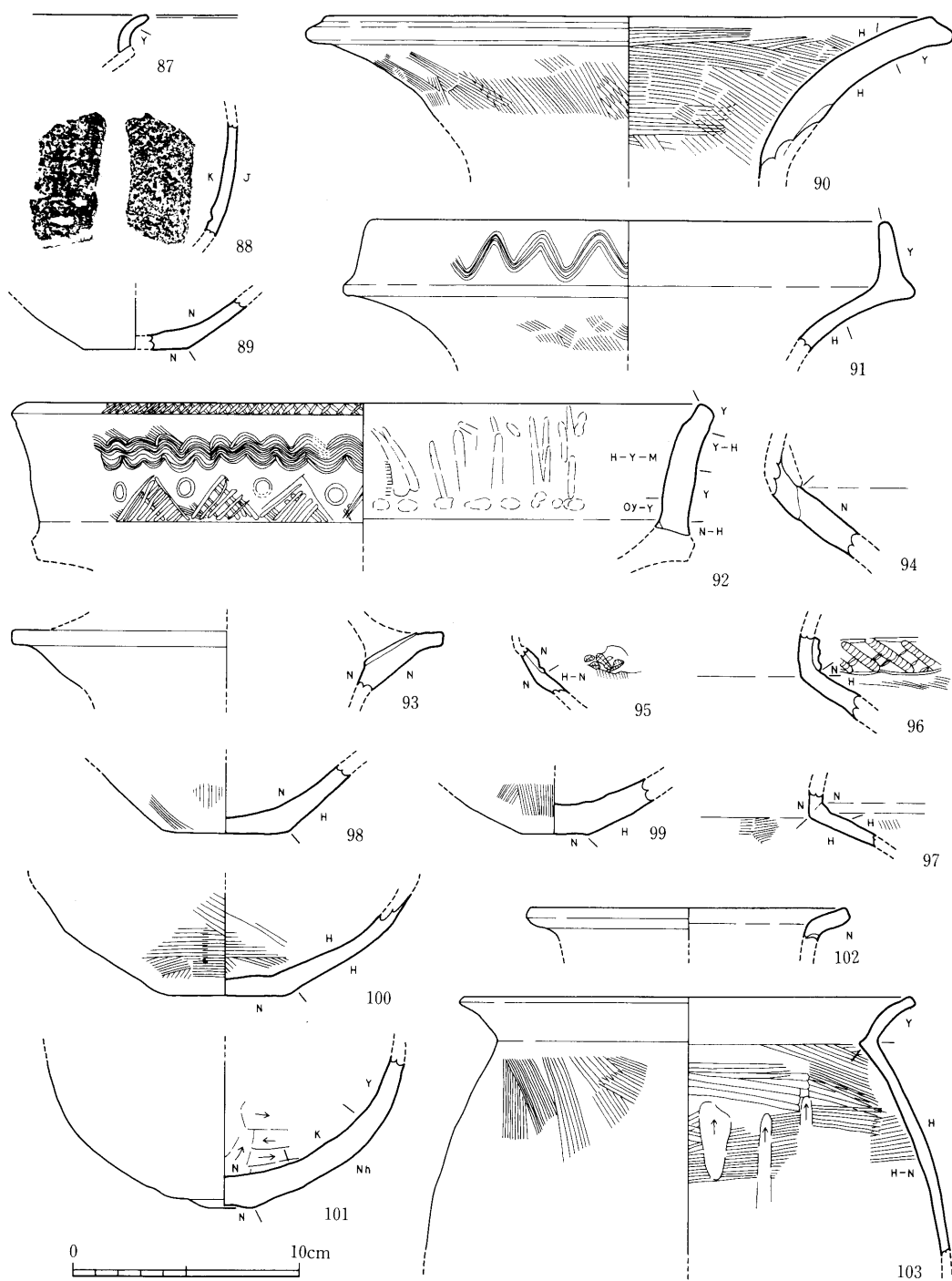


Fig. 14 A区第6層出土遺物実測図(1)

A区第6層 (Fig. 14~17, PL.12~15・17)

縄文土器の甕・浅鉢、弥生土器の壺・甕・鉢・高坏・器台、土師器の壺・甕・高坏が出土した。

縄文土器 (87~89)

87は粗製の浅鉢。比較的丁寧に作られる。口縁端を接合し、下部は擬口縁となる。口縁はきつく外反し、端部はわずかに肥厚し丸い。88は粗製で器形は不明。外面に煤が厚く付着し、調整不明。89は粗製の甕の底部。胎土は、粘土が粗く軽石状に隙間がある。内面に炭化物が厚く付着する。

弥生土器 (90~114)

90~101は壺。90は口縁が外反しながら外傾し、ラップ状に開く。端部は丸くつくり、上方にゆるいカーブながら幅広の隆起で突帯を引き出す。頸部には、粘土帯の接合痕が見られ、突帯を貼りつけていたと考えられる。口縁端部の内外面に煤が付着する。91は複合口縁だが、上下の口縁の接合部ははっきりしない。上段の口縁はわずかに内傾し、端部は丸い。外面に3本1単位の櫛描波状文を施す。92は複合口縁の上段で、下部は擬口縁をなす。わずかに外反して外傾する。接合点近くの内面は、指で押さえたのち横ナデ。文様は、上部に施文具の両端を交互に基点として扇形をつなぐように7本1単位の櫛描波状文を施し、下部にヘラ描きの鋸歯文、その中に斜格子文を施す。鋸歯文の間には竹管文を押す。端部はカマボコ形で、斜め外方に面をもつ。端部の斜格子文は、右下がりを先に、右上がりを後に刷毛状工具でつける。93は複合口縁の下段。上段は接合点の上で欠損する。鏝状に水平にやや長く伸びる。94は突帯が剥落したと思われる頸部。器壁は厚く、粘土帯の接合部に段差ができる。95は平たい突帯を貼り付けた頸部。突帯には刷毛状工具で斜格子文を刻む。工具は目が粗く、他の原体とは別の物と思われる。96は突帯を貼り付けた頸部。突帯上の斜格子文は、先に右下がりに角の丸い刷毛状工具で、後に右上がりに細い工具で切るように刻む。97は頸部で、突帯は貼り付けない。立ち上がり部分に粘土帯の接合痕が見られる。98は平底の底部。外面に煤が、内面に炭化物が厚く付着する。99は底部の小さな平底。内面に炭化物が厚く付着する。100は平底の底部。胴部はゆるく内弯して立ち上がる。外面の一部に煤が付着する。刷毛は1単位8本。101は痕跡的に残る平底。底部は長径が1.9cm短径が2.7cmの楕円形を呈し、わずかに上げ底となる。胴部外面に焼成時の黒斑が見られる。

102~106は甕。102は口縁端部外側に面をもつ。103は器壁がやや薄い。口縁は外反して

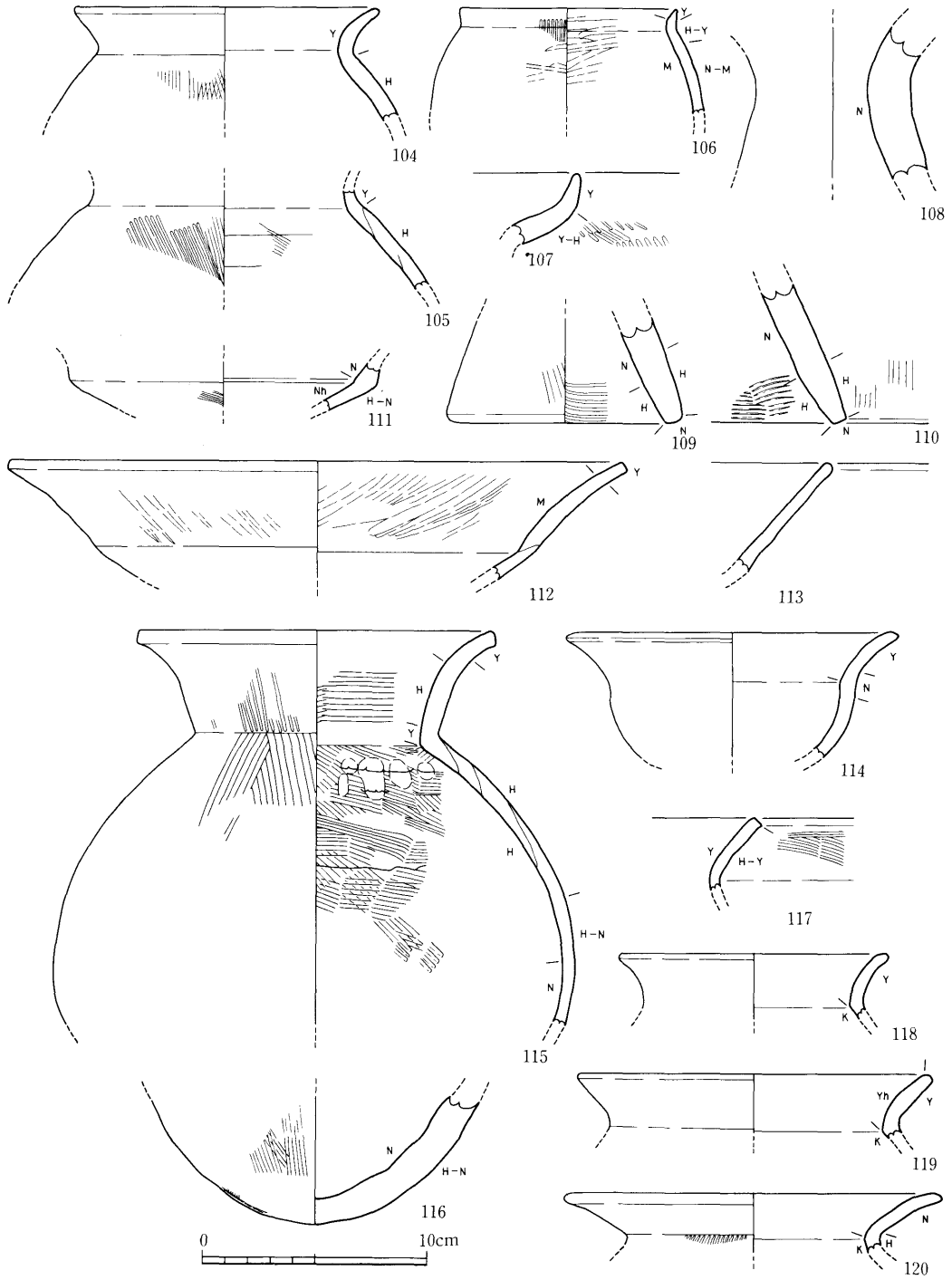


Fig. 15 A区第6層出土遺物実測図(2)

A区第6層出土遺物

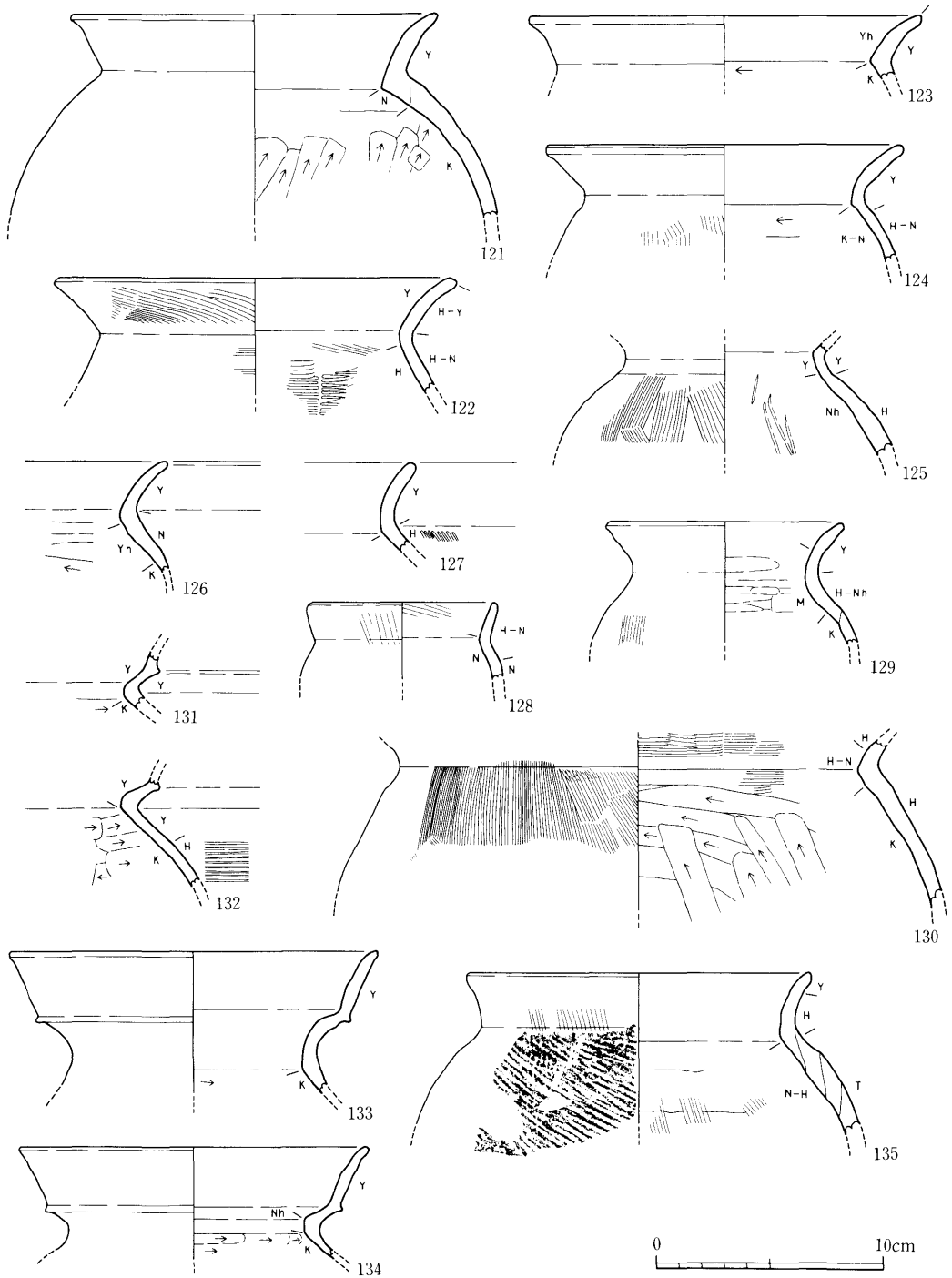


Fig. 16 A区第6層出土遺物実測図(3)

外傾し、端部で上方につまみ外側に面をもつ。口縁は歪みが大きい。内面の刷毛は、目のつんだもの、粗いものの2種類がある。内面は刷毛のち下から上へ部分的にナデる。外面全面に煤が付着する。104は頸部が明瞭な稜をもたず、ゆるいカーブを描く。口縁端部は丸い。胴部に刷毛を施した後、頸～口縁をナデる。105は頸部が明瞭な稜を持たずゆるいカーブを描く。内面は粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。外面の刷毛は1単位7本。外面全体に煤が付着する。106はごく短い口縁がつき、端部は尖る。全体が丁寧につくられる。外面に煤が付着する。

107は器台または台付鉢の口縁と思われるが、器形不明。器壁が厚い。口縁は内弯気味に立ち上がり、端部は丸い。

108～110は器台。108・109は風化が進む。110は108と同一個体かもしれない。端部がやや細くなり、内端面が接地する。内面の刷毛原体は年輪幅がよくわかる。

111～113は高坏。111は刷毛目が細かく9本1単位で幅1.0cm。112は大型の坏部。坏中央で粘土帯を接合し成形する。内外面ともかなりの剝落があり、調整がわかりにくい。

114は鉢。頸部はゆるいカーブを描き稜をもたず、やや長い口縁がつく。端部は上方に面をもつ。外面に煤が付着する。

土師器 (115～141)

115・116は壺。115は口縁が長く、端部付近で外反して外傾する。端部は角張り、外面に面をもつ。胴部は球形に膨らみ、最大径は中央部よりやや下にある。胴部内面は粘土帯の継ぎ目が明瞭に残り、成形時に強く押さえた部分は、刷毛目がつかない。116は丸底の底部。器壁が厚い。外面に焼成時の黒斑がみられる。

117～127・130は甕。117は口縁端部に向け徐々に肥厚し、外側につまみ出す。斜め上方に面をもつ。外面を黒くいぶす。118は口縁が外反しながら外傾し、端部は丸い。外面の一部に煤が付着する。119は器壁が厚く、端部が丸い。120は頸部での屈曲がきつく、口を大きく開く。口縁端部は丸い。外面に煤が厚く付着する。121は胴部が球形に張り、口縁はわずかに外反しながら外傾する。頸部は粘土帯を接合して厚く、内側につまみ出して稜をもつ。粘土帯の継ぎ目痕が明瞭に残る。外面の胴中央部付近に煤が厚く付着する。122は頸部が「く」の字に曲がるが、明瞭な稜はもたない。端部は肥厚し、斜め上方に面をもつ。口縁に部分的に煤が付着する。123は器壁が厚い。口縁端部は外面に面をもち、上端が角張り、下端は丸い。124は頸部内面の稜がやや突出し、外面は押さえられ、器壁が薄くなる。口縁端部は、側面と上方に面をもち肥厚する。125は胴部中央の器壁が厚く、頸部は薄い。

A区第6層・第8層出土遺物

内面には縦方向のヘラナデを施すが、部分的にヘラの痕がはいる。126は頸部付近の器壁が厚い。頸部はゆるいカーブを描き、明瞭な稜はもたない。口縁端部は丸い。127は口縁端部が丸い。外面に煤が付着する。130は大形品。内面のケズリは、胴中央付近に最初強く横にのちに弱く縦に施す。外面の刷毛は細かく、1単位11本。内外面に部分的に煤が付着する。

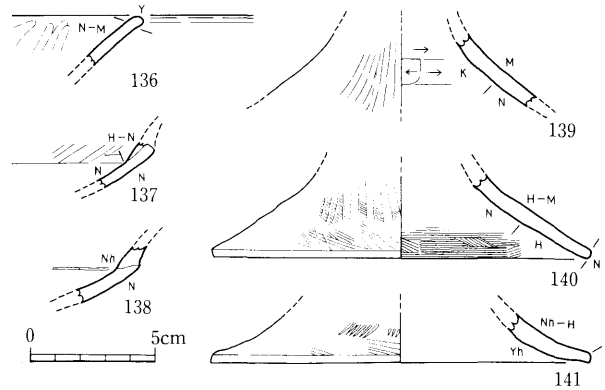


Fig. 17 A区第6層出土遺物実測図(4)

128・129は小形丸底壺と考えられる。128は口縁端部が斜め上方に面をもち、内側は尖り、外側は丸みを帯びる。129は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜はもたない。口縁端部は外側に面をもつ。胴中位に粘土帯の継ぎ目と見られる凹凸がある。外面に煤が付着する。

131～134は山陰系の複合口縁の甕。131は頸部の器壁が薄い。外面の一部に煤が付着する。132は刷毛が1単位11本で、1本の幅が広い。133は頸部上の稜を細くつまみ出し、口縁端部も外側につまみ出す。外面の一部に煤が付着する。134は頸部上の稜を細く強く引き出す。口縁内外面に部分的に煤が付着する。

135は庄内系の甕。胴部の器壁は厚く、内面には粘土帯の継ぎ目が目立ち、凹凸も大きい。口縁は外反し端部は上方に面をもつ。胴部外面には右下がりのタタキを施す。

136～141は高坏。136は直線的に伸びる坏口縁で、端部は肥厚し丸い。137は坏部の傾きの変換点付近で、下部は擬口縁をなす。上部の粘土で包み込むように接合する。138は坏部の傾きの変換点付近で、内側はヘラを連続して押しつけ、沈線をつくる。139はわずかに外反する脚中央部。140は端部が面をもち、内端面が接地する。内面の刷毛は上部がやや粗い刷毛、端部付近は1単位14本で幅1.0cmの目のつんだ刷毛を用いる。141は器壁が厚い。端部は面をもつが、140ほど稜ははっきりしない。接地面をつまみ出す。

A区第8層 (Fig. 18, PL. 15)

縄文時代晩期の単一層。142・143は精製の浅鉢。142の口縁は粘土を接合して成形し、外反しながら外傾する。体部は直線的。143は端部を貼り付けわずかに内傾する玉縁となる。体部側は滑らかな擬口縁を形成する。器壁は薄い。

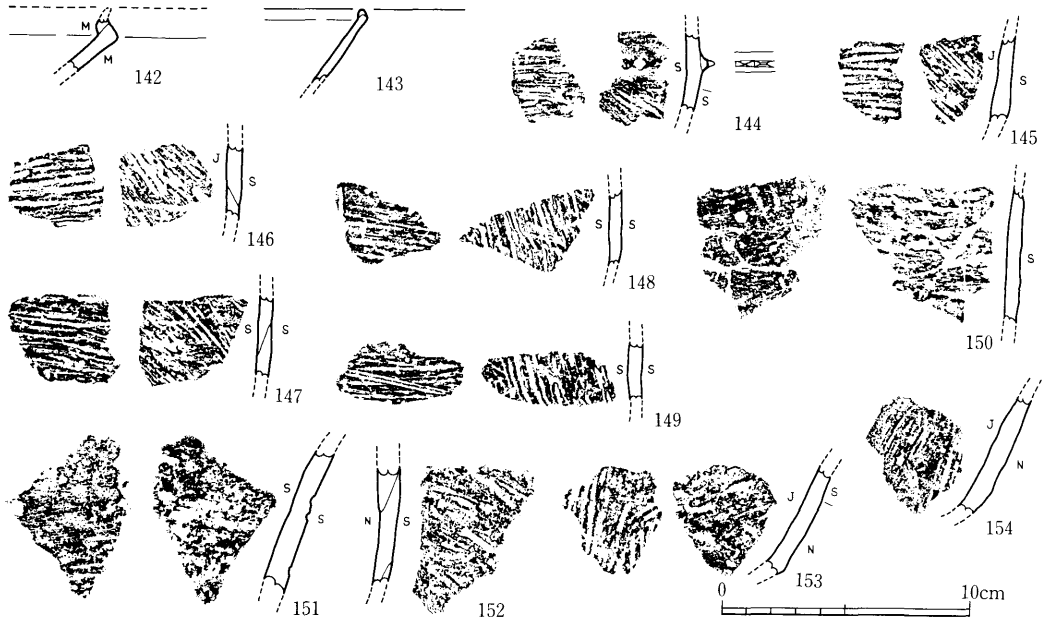


Fig. 18 A区第8層出土遺物実測図

144・150は粗製の甕。144は幅が狭く高い突帯を貼り付ける。突帯には刻み目を施す。150は外面を板小口によるカキトリで条痕風に調整し、器壁の凸凹が激しい。

145～149・151～154は粗製の深鉢と考えられる。いずれも小片で、上下や傾きははっきりしない。145・146は内面に貝殻条痕、外面に条痕風擦過がつき、互いの方向は斜交する。147は内面に幅0.9cmの板小口で擦過を施す。148の内面調整に使用した工具は幅1.2cmでわずかに外側へ湾曲する。149は内面の擦過がミガキ状に丁寧な施される。使用した工具は細く幅0.4cm程度であろう。151は器壁が厚い。外面には部分的に条痕状のくぼみが残る。152は粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。153は底部付近と考えられる。一部が焼成時の火ぶくれをおこしている。154は底部付近と考えられる。外面に条痕は認められず、粗いナデで調整を行う。

A区第10層 (Fig.19-155~157, PL.15)

縄文時代晩期の単一層。155は精製の浅鉢と考えられる。器壁は薄く、胎土はよく締まる。156・157は粗製の甕または深鉢と考えられる。156は風化が進み器面調整が判断できない。157は粘土帯を接合した内側が肥厚する。

A区第13層 (Fig.19-158~160, PL.15)

縄文時代晩期の単一層。158～160は粗製の甕または深鉢と考えられる。158は器壁が厚

A区第15層出土遺物

く、粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。159は内面に丁寧にヘラナデをするが、部分的にヘラがのめり込んでいるところがある。

A区第15層 (Fig. 20, PL.15)

縄文時代晩期の単一層。161・162は精製の浅鉢。161は口縁は体部に粘土帯を接合して成形し、体部側は擬

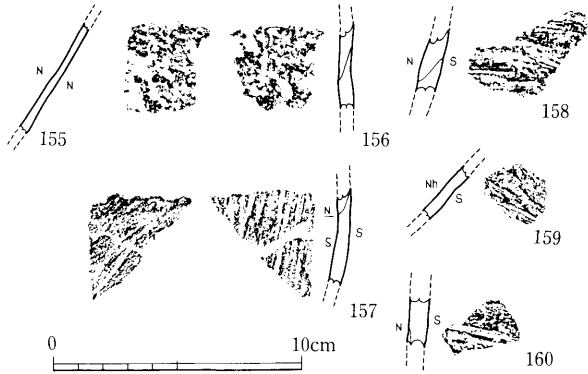


Fig. 19 A区第10層・第13層出土遺物実測図

口縁をなす。口縁はきつく外反し、端部は玉縁状に肥厚する。162は口縁部。外面は直線的で、内面は肥厚する。163は精製の甕。口縁は屈曲部で接合し、端部は丸い。肥厚させた屈曲部と口縁端部に刻目を施す。

164は粗製の甕。肥厚させた屈曲部に刻目を施す。刻目は小さくて浅く、砂粒にあたるころもあり明瞭ではない。165・166は刻目突帯文をもつ粗製の甕。165は突帯の断面が台形。突帯を貼り付けた部分の上下がくぼみになっている。刻み目は下ぶくれの洋梨型で、カーブのきつい工具か2回に分けて施したかの可能性が考えられる。端部は斜め上方に面をもつ。外面は下部はにぶい黄橙色だが、端部寄りにはオリブ黒色に近くなる。166は突帯の断面が三角形で高さがあまりない。刻目が不揃いで胎土が粗いため、刻目ははっきりし

ない。内面上部は板状工具で丁寧に横ナデを施す。167～169

は粗製の甕または深鉢と考えられる。167は粘土帯を接合した部分の内側が肥厚する。168は外面にヘラなどの工具による痕が入り、粘土帯の接合時のオサエとも考えられる。169は風化が進み器面調整が判

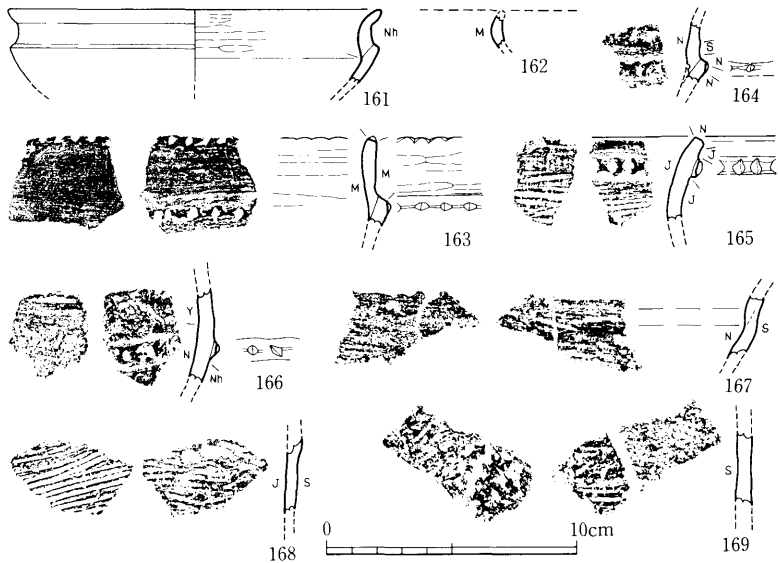


Fig. 20 A区第15層出土遺物実測図

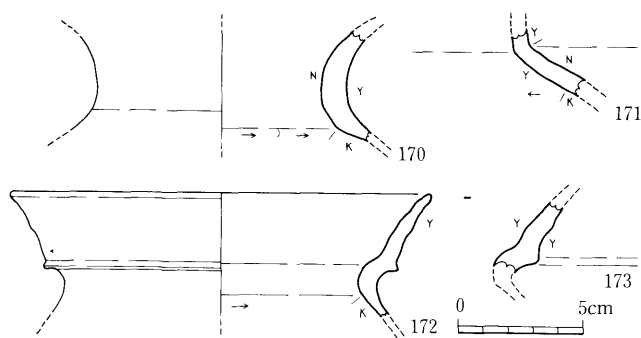


Fig. 21 A区攪乱墳・排土出土遺物実測図

断できない。

A区攪乱墳・排土 (Fig. 21, PL. 16)

170・171は弥生土器の壺。170は頸部の器壁が厚く胴部は薄い。外面は白っぽく、化粧土を塗った可能性も考えられる。171は器壁が厚い。172・173は土師器の山陰系の

複合口縁の甕。172は頸部上の稜を強く細くつまみ出す。口縁部は成形時のナデの凹凸が大きい。外面に煤が付着する。173は器壁が厚く、頸部上の稜もはっきりしない。外面に煤が付着する。173は配水管工事に伴う攪乱墳から、他は排土から出土した。

B区 (Fig. 22・23, PL. 16)

縄文土器の甕・深鉢、弥生土器の壺・甕・高坏、土師器の壺・甕・鉢・皿、土師質土器の鍋が出土した。

縄文土器 (174~180)

174~176は粗製の深鉢。174は口縁外面に粘土帯を貼り付け、肥厚させる。端部はやや尖る。175は口縁の器壁が厚く、端部は丸い。外面下部にはわずかに条痕風擦過が見られる。176は器壁が薄い。口縁は外反し、口縁端部は肥厚して玉縁状に丸くおさめる。177は粗製の甕。胴上部の外傾から内傾に傾きが変わる部分で、上部は擬口縁をなす。接合部の内面には長さ6cm余りの沈線がある。178は粗製の甕または深鉢。

179・180は甕の底部。上げ底で、179は外端面が、180は内端面が接地する。

176は第23層、178は表面採集、他は第6層から出土。

弥生土器 (181~191)

181~184は複合口縁の壺。181は鏝の上部に沈線が巡る。櫛描波状文は左から右へ描き、基本は3本だが、継目で描き足し4本の部分もある。施文がぎこちなく角が多い。182・183は上段の口縁下部が擬口縁をなす。口縁端部上面に面をもつ。波状文はともに4本単位で左から右へ描くが、183は描き損じのやり直しがみられる。184は頸部からラッパ状に開き、口縁がT字形となる。下垂する部分で上段の口縁が接合される。端部は内面に面をもち、傾斜する。櫛描波状文は5本単位で、右から左へ施される。内面の上部には焼成時の黒斑が見られる。

B区出土遺物

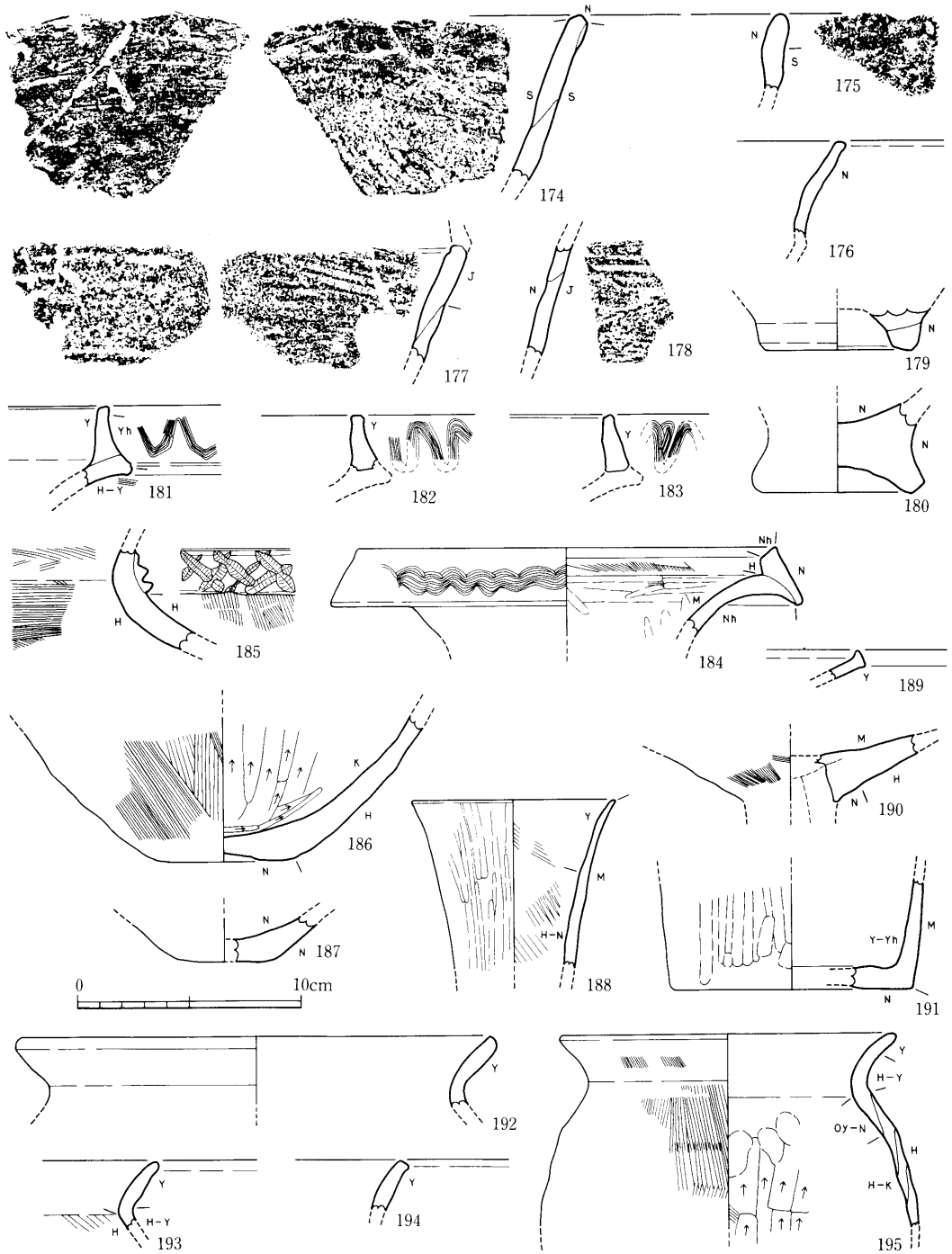


Fig. 22 B区出土遺物実測図(1)

185は突帯を貼り付けた壺の頸部。突帯は下側が厚く、斜格子文の刻みも深い。刻みは刷毛状工具で、先に右上がり、後に右下がりの順に施す。

186・187は壺の底部。186はわずかに上げ底になる。外面に黒斑があり、内面には炭化物が厚く付着する。187は内面に少量の炭化物が付着する。

188は長頸壺。きわめて丁寧なつくりで、器壁が非常に薄い。口縁はゆるく外反しながら外傾し、端部はやや角張る。外面のミガキは上下両方向から施し、中央部で痕跡がうすくなる。内面上部は皮状の素材を使ってナデて、刷毛目状の痕跡が残る。

189は跳ね上げ口縁の甕。

190は高坏。坏部は、脚の外周を先に接合した後、坏中央を充填する方法が採られていると思われる。坏側の接合面は擬口縁をなす。

191は器形不明。平底で、胴部はほぼ直立する。外面には丁寧なミガキが施される。下関市伊倉遺跡9号土壘出土の甕⁴⁾もしくは大分県国東町安国寺遺跡出土の皮袋状土器などに近いと思われる。

土師器 (192~208)

192~198は甕。192は口縁外面が肥厚する。端部は斜め上方に面をもち、外側は丸く、内

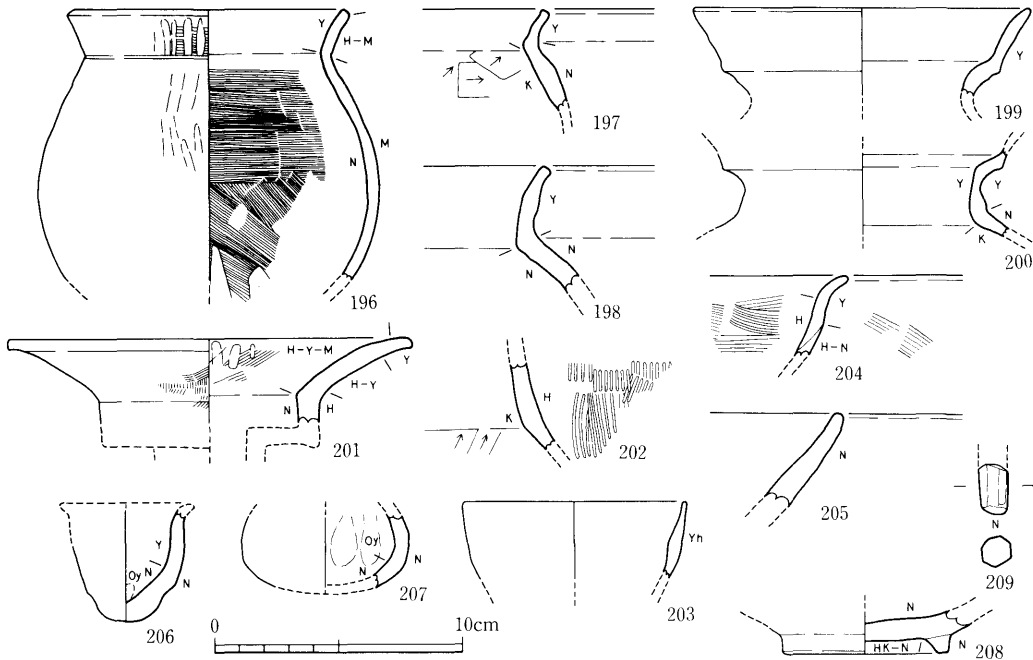


Fig. 23 B区出土遺物実測図(2)

B区・C区出土遺物

側はつまみ上げる。193は口縁中位がやや膨らみ、端部外面が肥厚する。外面に煤が付着する。布留系かと考えられるが、小片のため判断できない。194は口縁端部外面をつまみ出し、斜め上方に面をもつ。195は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜をもたない。胴部内面はきれいにナデられているが、粘土帯の継ぎ目は凹凸となって表われている。口縁端部は丸い。外面に煤が厚く付着している。196は頸部がゆるいカーブを描き、明瞭な稜をもたない。胴部は球形で器壁が薄い。口縁はやや厚く、外面斜め上方に面をもつ。頸部外面は棒状の工具で沈線を巡らす。外面のヘラミガキは丁寧になされ、単位がつかめない部分が多い。内面は皮状の素材でナデられ、刷毛目状の細かい線がつく。197は胴部の器壁が厚く、口縁は薄い。口縁端部は斜め外方に面をもち、内面をつまみ出す。外面に煤が付着する。198は布留系の甕。口縁外面の中位と端部が肥厚する。端部は斜め上方に面をもつ。

199・200は山陰系の複合口縁の甕。接合はしないが、同一個体と思われる。頸部上の稜ははっきりしない。口縁の器壁の厚さは、部分によりばらつきがみられる。

201・202は高坏。201は畿内系と思われる。器壁は厚い。ほぼ直立する部分から外反して大きく外傾する。端部は丸い。全体に丁寧なつくりで、内面は特にきれいに仕上げる。202は脚中位。外面の刷毛は1単位7本で1本ずつが幅広。内面にはヘラナデ風の滑らかなケズリが施される。

203は直口壺もしくは小形丸底壺と思われる。わずかに内弯して伸びる。器壁は薄い、口縁端部は丸くつくる。外面に淡い黒斑が認められる。

204は鉢。体部がゆるく内弯し、口縁が外反する。端部は丸い。205は台付鉢。器壁が厚く、体部は直線的に伸び、口縁端部は丸い。

206・207は手捏のミニチュア土器。206は甕形。底部は楕円形で長径2.0cm、短径1.5cmを計る。器壁が厚く、形は左右非対称である。207は碗形と思われる。内面の指オサエは下から上へ施される。

208は皿。底部はヘラ切りのち高台を貼り付け、内端面が接地する。11世紀頃と考えられる。

191・196・207は第21層、194は第23層、205は表採、208は攪乱層、他は第6層から出土。
土師質土器（209）

209は土師質土器の足鍋の脚端部。先端は丸くおさめられ、猫足にはならない。中世。

C区 (Fig. 24, PL.16)

210～212は第22a層から出土。210は土師器の甕。直線的に伸び、端部が肥厚し、中央が

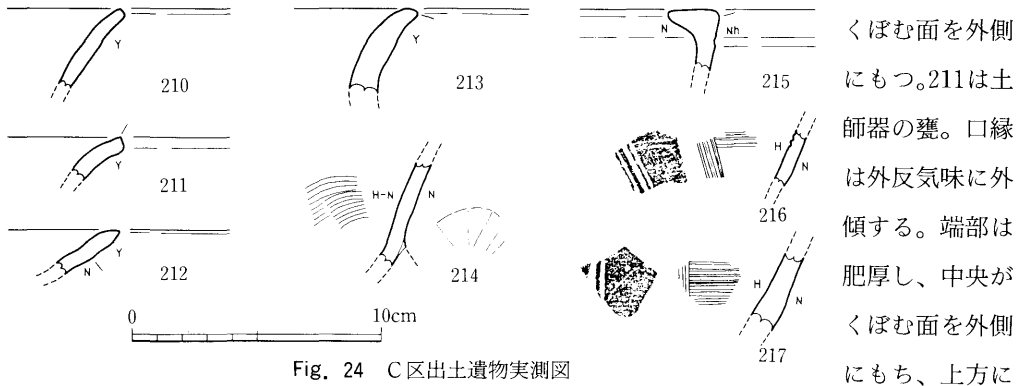


Fig. 24 C区出土遺物実測図

つまみ出す。外面に煤が付着する。212は土師器の皿。口縁は肥厚し、端部はやや尖る。内面に黒斑が見られる。山口盆地内の大内氏関連遺跡で多量に検出される製品と同一と考えられる。

213～217は表土層から出土。213は弥生土器の甕。器壁が厚い。口縁端部はやや尖り、上方に面をもつ。214は瓦質土器の足鍋。脚は剥落し、接合面は丁寧にナゲられている。215は土師質土器の火鉢。口縁は肥厚し、内側へほぼ直角に折り曲げられる。外面の口縁の下1.1cmに沈線が巡るが、スタンプ文は認められない。216は瓦質土器の搦鉢。器壁が薄い。オロシ目は3本以上認められ、断面はそれぞれV字形をする。217は土師質土器の搦鉢。粗い横刷毛のちオロシ目を刻む。

石器 (Fig. 25・26, PL. 18)

218・219はサヌカイト製の石鏃。218は凹茎無茎式。脚の片端を欠損する。器幅に比べ器長が長い二等辺三角形。背面中央部の4枚の剥離面は、素材面の可能性がある。腹面茎部側の調整加工は比較的粗い。抉りは円弧状で浅く変曲する。弥生時代のものと思われる。A区第7 a層から出土。219は平茎無茎式に近い。脚の片端を欠損する。背面中央部および腹面下半部には素材面を残す。調整加工は背面に見られるように、比較的粗雑。腹面中央部には左側縁側からフルーティング状の調整加工が施される。抉りはきわめて浅く、脚部はつくり出されない。縄文時代後期～晩期の可能性が高い。A区第13層から出土。

220・221は二次加工のある剥片。共にサヌカイト製。220は上半部を欠損する。背面右側縁にやや粗い二次加工がみられる。腹面側がネガ面。A区第10層から出土。221は下端部を欠損する。単設打面の石核から剥離された小形の縦長剥片を素材とし、左右両側縁に背腹両面から二次加工を施す。ネガティブバブルが残存する。二次加工は素材に比べて大きな剥離面によって構成される。A区第8層から出土。

出土石器

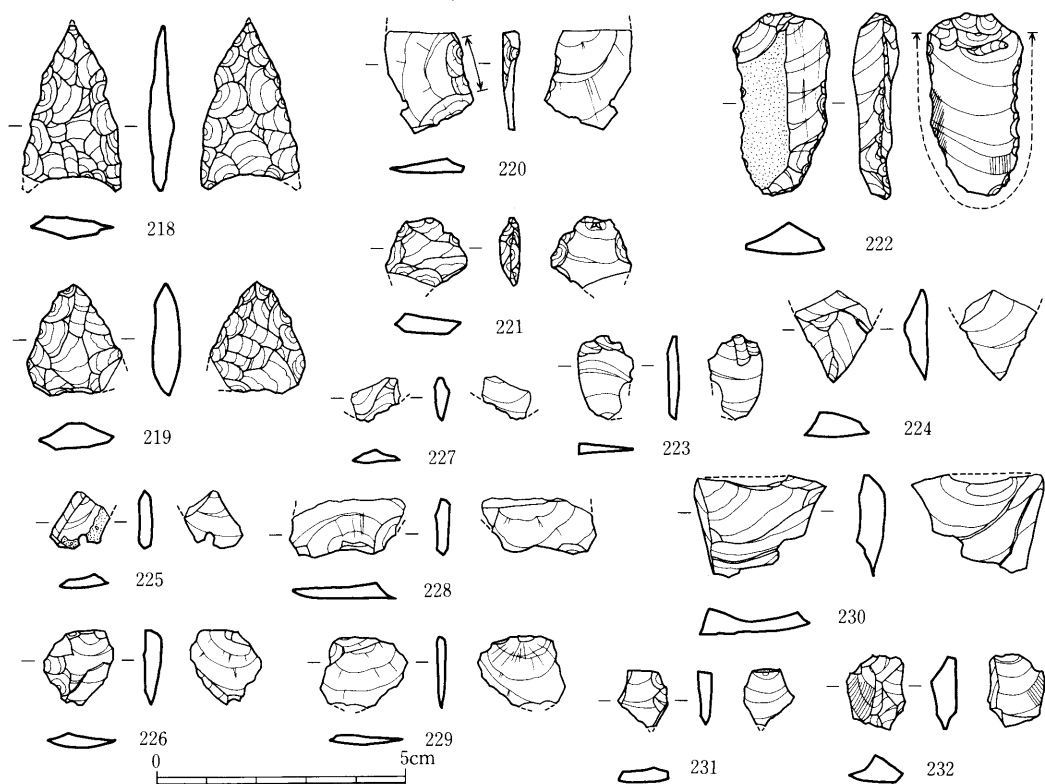


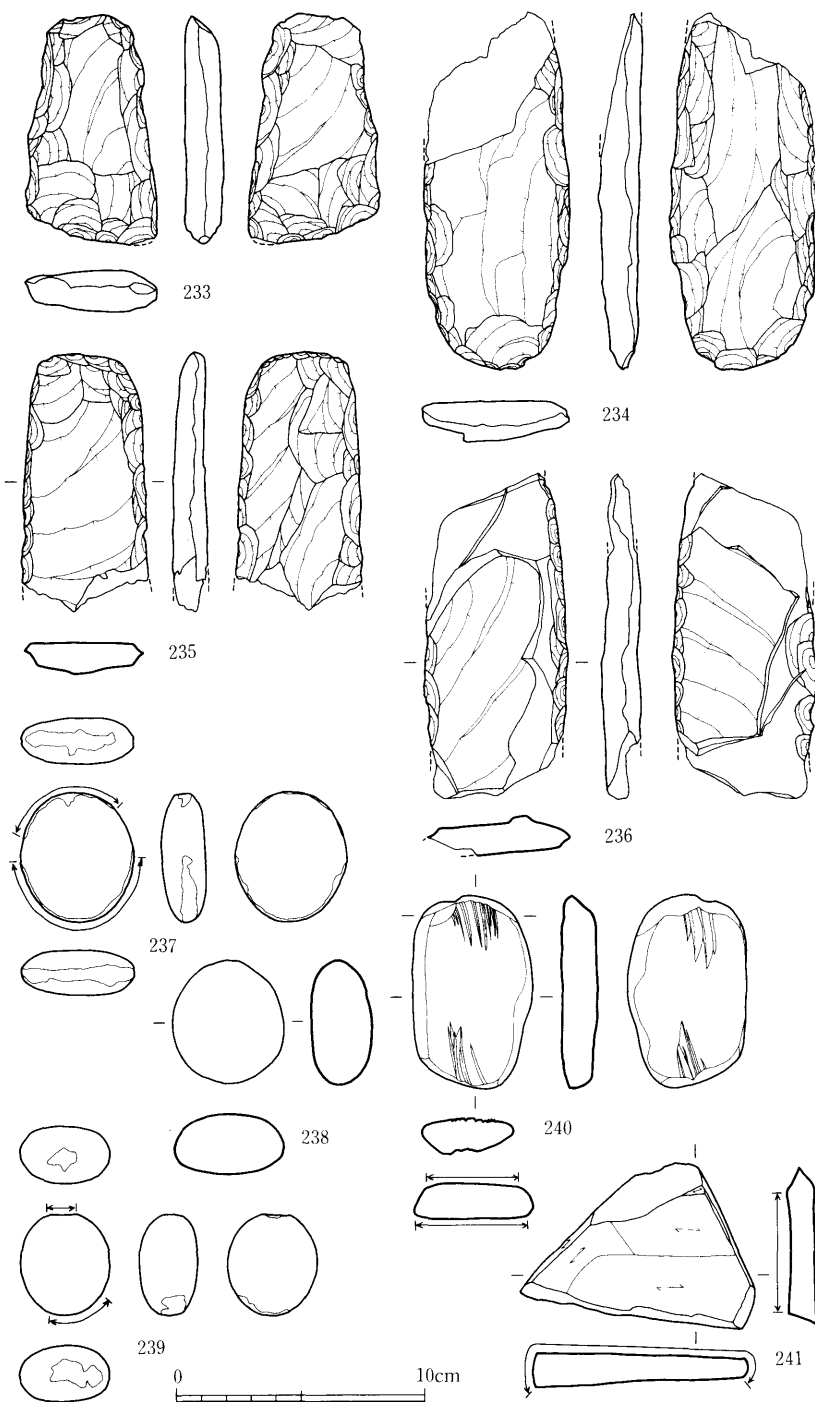
Fig. 25 出土石器実測図(1)

222は腰岳産黒曜石の使用痕のある剥片。縦長剥片を素材とし、剥片剥離後、調整加工によってネガティブバルブを除去する。左右両側縁に連続する微細な剥落痕が認められる。背面左半には自然面が残存する。素材の打面は複剥離打面。A区第13層から出土。

223は腰岳産黒曜石の調整剥片。黒曜石は不純物をわずかに含んでいる。打面を180転位する石核からつくり出された小形の縦長剥片。腹面のネガ面にバルブを除去するように調整加工を施す。A区第10層から出土。

224は姫島産黒曜石の縦長剥片。上半部を欠損する。打面を頻繁に転位する石核からつくり出す。腹面側がネガ面。背面右半の剥離面は階段状剥離となる。A区第6層から出土。

225～232は剥片。225は淀姫産黒曜石と考えられ、226・228～230はサヌカイト、227・231・232は姫島産黒曜石である。225は上半部を欠損する。背面右半、下端に自然面が残存する。226は寸づまりな縦長剥片。打面は複剥離打面。227は上半部の大部分を欠損する。背面の3枚の剥離面の打撃方向は大きく異なる。228はリングの集合状態からみて寸づまりな横長剥片と考えられる。腹面側がネガ面。背面側にはポジティブバルブが残存し、背腹両面の



大きな2枚の剥離面の打撃方向は180°ずれている。229は寸づまりな小形の縦長剥片。下端部を欠損する。打面は狭い平坦打面。230は寸づまりな横長剥片。打面を一部欠損し、背面側に傾斜する。腹面側がネガ面。231は寸づまりな小形の縦長剥片。下端部を若干欠損する。自然面を打面とする。腹面側がネガ面。232は小形の縦長剥片。打面を頻繁に転位する石核から作り出される。腹面側がネガ面で、ネガティブバルブ、打点が残存する。225～227はA区第13層、228はA区第

Fig. 26 出土石器実測図(2)

10層、229～232はA区第15層から出土した。

233～236は結晶片岩製の粗製扁平打製石斧。233は背腹両面のネガ、ポジは不明。両面中央部の大きな剥離面は素材面。両側縁、刃部とも調整加工は対向剥離に近い。各剥離面はやや大きく粗雑。刃部は片縁に直線的に傾く。A区第6層から出土。234は頭部を欠損する。背面がネガ面。短冊形で、刃部は孤状に弯曲する。調整加工は両側縁に限定され、中央部の大半は素材面をそのまま残す。両側縁とも交互に剥離する。A区第13層から出土。235は刃部を欠損する。頭部の調整加工は交互剥離で、腹面側に背面側から特に丁寧に行われ、孤状の頭部をつくり出す。背面側がネガ面。両側縁の調整加工は1～2枚の剥離面によって構成される。A区第15層から出土。236は刃部と頭部を欠損する。両側縁の調整加工は縁辺に沿って各1枚の剥離面によって構成される。対向剥離による。剥離面に沿った素材の剥落が著しい。A区第11a層から出土。

237・239は敲打痕のある円礫。238はその素材。237は円礫素材の河原石を用い、側面中央部を除いて連続する浅いあばた状の敲打痕が認められる。239は円礫素材の河原石を用い、上下両端に浅いあばた状の敲打痕が認められる。237に比べ敲打の部位は少ない。238は円礫の河原石を用い、敲打痕のある円礫の素材と考えられる。敲打痕は認められない。237はA区第7a層、238・239はA区第8層から出土。

240・241は砥石。240は礫利用の砥石で、周縁を除く正裏2面を研砥面とする。正裏両面の上下両端中央部には、小形品の刃部の研磨による断面V字形の小溝が連続する。その他の部位の研砥は不定方向。石器、鉄器のいずれに用いたかはわからない。D区表土層から出土。241は裏面側は素材面のままで研砥面として利用されていない。研砥面は正面、左右両側面の3面にある。正面は少なくとも3方向の研砥が認められる。正面上半の剥離面のパティナは新しく欠損している。他の剥離面はパティナが古く、素材面の可能性が大きい。各研砥面は緻密で仕上げ砥と考えられる。B区第6層から出土。

5 小結

ここでは本章の発掘調査の成果と、ほぼ同区域を調査し、本書第5章第3節(71～80ページ)に掲載した教育学部附属山口中学校污水排水管布設に伴う立会調査の成果とをまとめて述べてみたい。

2回の調査で検出した遺構は、溝状遺構2条のみであった。ともに削平が著しく、包含される出土遺物も小片のため時期決定の要素に欠ける。A区第1号溝状遺構は直上層の第5層および第6層が、弥生時代後期後半から古墳時代初頭を下限とする遺物包含層となっ

ていることから、弥生時代後期終末から庄内併行期にかけて埋没したと考えられる。この2層は第6層が第5層に比べ、弥生土器の比率が土師器に比べやや高いが、包含する遺物の時期はどちらも縄文時代晩期から布留式併行期までであり、厳密な時期差を示すことはできない。A区第8層以下第15層までは縄文晩期後半の包含層を形成している。また、C区と立会調査で調査したプール管理棟周辺のD・E路線は、近代の埋め土の直下に、室町時代のものと思われる遺物を含む中世の包含層が薄く堆積している。中世の包含層の遺物はやや小片であるが、いずれの包含層に含まれる遺物も比較的摩耗は進んでおらず、接合可能な遺物もあることから、附属山口中学校敷地からそう遠くはない地点の集落遺跡から遺物が流れ込んだと考えられる。時期は縄文時代晩期の短期間に数回にわたり、次に弥生時代後期後半から古墳時代初頭に徐々にあるが大規模に、最後に室町時代に小規模な流れ込みが推定できる。方向は、鴻峰山東麓の五十鈴川および一の坂川に沿った谷筋が考えられるが、現在のところ縄文時代から古墳時代の集落遺跡として周知されている遺跡は上流域には存在しない。中世の遺跡は、鴻ノ峯城跡・古城ヶ岳城跡が知られているが、距離的にやや離れ、これらの遺跡からの流れ込みと考えるのは無理がある。

B区はA区とは約5mしか離れていないが、ヘラナデやミガキなどを施した丁寧に作られた、祭祀的性格を含む遺物を若干出土している。188の長頸壺、191の筒形の製品、201の高坏である。また、立会調査のD路線でも台付鉢や鼓形器台を検出しており、生活遺跡の一部に祭祀的要素を含む遺構があった可能性も考えられるが推測の域を出ない。堆積状況から考えて同一遺跡からの流れ込みであり、2か所以上の遺跡からの流入と見るのは困難であろう。

出土遺物の中にいくつか特徴的なものが見られる。刻目をもつ縄文土器、弥生土器の複合口縁壺、器台、庄内系の甕、山陰系の甕・鼓形器台、中世の瓦器・土師器などである。

刻目をもつ縄文土器は、屈曲した胴部に刻目をもつもの（A区第15層163・164）、164は欠損していてわからないが、さらに口縁端部にも刻目をもつもの（163）、刻目突帯文をもつもの（A区第8層144、A区第15層165・166）がある。山口盆地内で縄文時代晩期の土器を出土する遺跡は当遺跡の北東3.2kmに位置する桜島遺跡⁶⁾、北東2.2kmに位置する屋敷遺跡⁷⁾、盆地南西端の西遺跡⁸⁾などがあり、桜島遺跡、屋敷遺跡は縄文時代晩期前半の月崎上層Ⅰに、西遺跡Ⅰ区河川跡出土の遺物は縄文時代終末に位置づけられ、附属山口中学校出土の土器はその間の時期にあたる。そして防府市奥正権寺遺跡第Ⅲ区土壇出土遺物¹⁰⁾とほぼ同じく、月崎上層Ⅲ、岩田遺跡五類¹¹⁾に対応する縄文時代後期後半と考えられる。

小結

弥生土器の複合口縁壺は、a)立ち上がり部が短く、外面に櫛描波状文を飾るもの、b)立ち上がり部が長くやや外傾し、櫛描波状文・鋸歯文・竹管文を飾り、口縁端部に斜格子文を飾るもの(A区第6層92)、c)立ち上がり部がやや長く、無文のものがある。aは更に立ち上がり部をT字状に頸部とつなぐ、山本一朗氏の編¹²⁾年の防長7式にあたるもの(B区184)、防長8式にあたる立ち上がり部を頸部の上で接合し屈曲部が鐙状に張り出すもの(B区181~183、立会調査15)、頸部から口縁端まで一体で作り出すもの(A区第6層91)があり、cは口縁端部が外反するもの(A区第5層7、立会調査13)と直線的に伸びるもの(立会調査14)がある。櫛描波状文をもつaは周防部の土器の影響を受け、無文のcは北部九州~長門の土器の影響を受けたものと思われる。bの立ち上がり部が外反する器形は、北部九州の影響のある複合口縁壺の形であるが、文様構成は安国寺式と呼ぶ周防灘沿岸の愛媛、大分の土器と共通する要素をもち、防長10式に相当すると思われる。

弥生土器の器台は器形の推定できるもので筒形、翼状突起をもつものが出土した。翼状突起の破片は昭和61年の試掘調査でも出土している。27は筒形で受部と裾部が同角度で開き、上から $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ を切り取る防府市右田一丁田遺跡のS-Bb I形¹³⁾に近いものと思われる。28は左右に大きな2枚の翼状突起、前方に小さい1枚の突起が付く右田一丁田遺跡のS-Da I形に近いと思われる。

胴部外面のタタキを特徴とする庄内系の土器は6点あるが、タタキのち刷毛を施すもの(A区第5層66・67)、幅広の横方向のタタキ(A区第5層68・69)、右下がりのタタキ(A区第5層67、A区第6層135)が見られ、一定していない。また、内面の調整は、ケズリを行わずナデや刷毛を施すもの(65・68・69・135)が多く、在地の土器との折衷形で、搬入品とは考えられない。山口盆地内の西遺跡の調査では湯田楠木町遺跡出土遺物もあわせ、いわゆる山陰系及び外面にタタキ目をもつ土器の胎土分析を行っている¹⁴⁾。その結果、山陰系の土器は周防領域の胎土から外れるが、タタキ目をもつ土器は周防領域の胎土と分析されており、タタキ目をもつ土器を在地産と考えても矛盾はしない。

山陰系土器の鼓形器台(A区第5層64)は、推定復元で器高12.6cm、くびれ部径9.4cmとなり、藤田憲司氏の鼓形器台の計測データ¹⁵⁾に基づくと、高さ/くびれ径=1.34となり、鍵尾式と小谷式の間のはぼ秋里I(出雲の知井宮)に相当する時期と考えられる。甕はいずれも複合口縁で、くりあげ口縁となるものはない。畿内の庄内期に並行すると考えても差し支えないであろう。山陰系土器は図化できたもので甕22点、鼓形器台2点の計24点出土し、全出土土師器の17%を占め周辺の遺跡の中では最も高率である。山口盆地への山陰

系土器の流入経路は、従来からいわれているように弥生時代後期後半以降、石見の高津川流域から阿武川水系、榎野川水系を伝わったと考えられる¹⁶⁾ ¹⁷⁾。器種は甕・器台に限られ生活用具のセットをなさないが、器面の調整技法は庄内系の甕のように個体ごとの乱れはなく、模倣であってもオリジナルにかなり忠実で、多少なりとも製作集団の移動または断続的な交易者の来訪が考えられる。当遺跡の遺物は胎土分析を行っていないが、先に述べた湯田楠木町遺跡、西遺跡の分析結果もあり、製作集団の移動に伴う土器の搬入も同時に考えられる。しかし、現時点では搬入品と、移住先での製作品との区分はできない。流入経路の阿武川水系にある徳佐盆地では数か所の遺跡が発掘調査されているが、突抜遺跡¹⁸⁾で庄内期まで下る遺物が出土するものの、他の遺跡は弥生時代後期前半の遺物を中心とする。これらの石見に隣接する山口県北部の遺跡から、後期後半に山口盆地への集団の移動の可能性も考えられる。

湯田楠木町遺跡では山陰系2点、庄内系16点、附属幼稚園・山口小学校を含めた白石遺跡では山陰系37点、庄内系6点を出土し、その比率は逆転している。また盆地内の他の庄内併行期の遺跡²⁰⁾では庄内系が山陰系に優る傾向がある。白石遺跡の現象は流れ込んだ遺跡の性格によるもので明確にしがたいが、山陰系の土器を作る技術を持った集団の拠点となる集落が存在した可能性が高いといえるであろう。

中世の遺物は、B区で1点、立会調査のD路線で1点、E路線で1点検出し多くはないが、C区では全出土8点中5点が該当する。小片が多く時期を決定する要素に欠けるが、C区出土の土師器の皿(212)は口縁が肥厚し、端部がやや尖り、大内B式土師器²¹⁾の特徴を備えている。大内B式と考えられる土師器は、附属山口中学校で今回の分を含め2点²²⁾、附属山口小学校で1点出土している。微量ではあるが、この土器が大内氏関連遺跡や大内氏の家臣団に関わる遺跡に偏在することを考慮すると、遺物の流入元の遺跡は確定できないものの、使用集団は限られてくるものと思われる。この土器が16世紀中葉の室町時代後期に比定されることから、今回検出した中世の遺物も大半がこの時期のものと思われる。

注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査」「教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」(『山口

注

- 大学構内遺跡調査研究年報VI』、1989年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1990年)。
 - 4) 山口県教育委員会『伊倉遺跡』(1973年)。
 - 5) 国東町教育委員会『安国寺遺跡』(1989年)。
 - 6) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会『桜畠遺跡』(1991年)。
 - 7) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会『屋敷遺跡』(1990年)。
 - 8) 山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。
 - 9) 潮見浩「月崎遺跡」(宇部市教育委員会、『宇部の遺跡』、1968年)。
 - 10) 山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡I』(1985年)。
 - 11) 潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」(『広島大学文学部紀要』第18号、1960年)。
 - 12) 山本一朗「防長の土師器」(周陽考古学研究所、『山口県の土師器・須恵器』、1981年)。
 - 13) 山口県教育委員会「右田・一丁田の調査」(『右田・一丁田遺跡 的場・宮の馬場遺跡 久米市遺跡』、1975年)。
 - 14) 三辻利一「西遺跡出土土器の蛍光X線分析」(山口市教育委員会、『西遺跡』、1987年)。
 - 15) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古學會、1979年)。
 - 16) 渡辺一雄「山口県におけるいわゆる「山陰系土器」について」(『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について 発表記録』、第18回埋蔵文化財事務局、1986年)。
 - 17) 高下洋一「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」(『RELICS』第3号、山口大学考古学研究室、1986年)。
 - 18) 阿武郡阿東町坂手沖尻遺跡、宮ヶ久保遺跡、羽波遺跡、馬場遺跡などが挙げられる。
 - 19) 山口県教育委員会『よみがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡-』(1985年)。
 - 20) 赤妻遺跡、下東遺跡、西遺跡などが挙げられる。
 - 21) 山口市教育委員会『大内氏館跡VIII』(1991年)。
 - 22) 前掲 1)、2)。

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

Tab. 2 出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	焼成	備考
A区 第5層 (Fig. 9~13)						
1	縄文土器 不明		灰褐色(7.5YR5/2)	やや不良	不良	粗製
2	縄文土器 甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
3	縄文土器 甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
4	縄文土器 深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
5	縄文土器 深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
6	縄文土器 甕or深鉢		①黒褐色(10YR2/2) ②黒褐色(10YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
7	弥生土器 壺	①11.9	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	複合口縁
8	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	7と同一個体
9	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
10	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
11	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	不良	やや不良	複合口縁
12	弥生土器 壺		にぶい橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
13	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	
14	弥生土器 壺	②4.6	にぶい橙色(5YR7/3)	やや不良	やや不良	
15	弥生土器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	
16	弥生土器 甕	①(14.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
17	弥生土器 甕		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
18	弥生土器 甕	①(11.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
19	弥生土器 甕	①(32.0)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良好	
20	弥生土器 甕	①(18.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良好	精良	
21	弥生土器 甕	②(6.8)	明褐色(7.5YR7/2)	良好	良好	
22	弥生土器 甕	②(4.1)	黒色(7.5YR1.7/1)	良好	やや不良	
23	弥生土器 甕		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	良好	
24	弥生土器 高杯		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	やや不良	
25	弥生土器 鉢	①(13.2)	浅黄橙色(10YR8/4)	不良	やや不良	
26	弥生土器 器台	②(10.0)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	やや不良	不良	
27	弥生土器 器台		浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
28	弥生土器 器台	②(11.3) ③16.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	やや不良	
29	土師器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
30	土師器 甕		①褐灰色(7.5YR/1) ②灰褐色(5YR5/2)	良好	良好	
31	土師器 甕	①(11.9)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	良好	
32	土師器 甕		灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	やや不良	
33	土師器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
34	土師器 甕	①(12.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	やや不良	
35	土師器 甕	①(20.8)	①浅黄橙色(7.5YR8/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	不良	やや不良	
36	土師器 甕	①(19.6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	良好	
37	土師器 甕	①(21.6)	①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
38	土師器 甕	①(11.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
39	土師器 甕	①(13.6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	不良	不良	
40	土師器 甕	①(13.8)	橙色(5YR7/8)	不良	不良	
41	土師器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
42	土師器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	44と同一個体?
43	土師器 甕		灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
44	土師器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
45	土師器 甕		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
46	土師器 甕		橙色(7.5YR7/6)	不良	不良	
47	土師器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
48	土師器 甕		橙色(7.5YR6/6)	やや不良	やや不良	
49	土師器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
50	土師器 甕		にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	やや不良	やや不良	
51	土師器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR7/6)	良好	やや不良	
52	土師器 甕		①赤黒色(2.5YR1.7/1) ②橙色(2.5YR6/8)	不良	良好	
53	土師器 甕		明褐色(7.5YR7/2)	やや不良	やや不良	
54	土師器 甕	①(16.5)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	山陰系
55	土師器 甕	①(15.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	山陰系
56	土師器 甕		①明褐色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	山陰系
57	土師器 甕		灰黄褐色(10YR6/2)	良好	良好	山陰系
58	土師器 甕		灰白色(7.5YR8/2)	良好	良好	山陰系
59	土師器 甕		①浅黄橙色(10YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	不良	不良	山陰系?
60	土師器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	山陰系
61	土師器 甕		①黒色(7.5YR1.7/1) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	良好	良好	山陰系
62	土師器 甕		①黒色(7.5YR2/2) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	山陰系
63	土師器 甕		①黒色(7.5YR1.7/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良好	良好	山陰系
64	土師器 鼓形器台	①(21.9)	橙色(5YR7/8)	やや不良	やや不良	山陰系
65	土師器 甕	①(16.8)	明褐色(7.5YR7/2)	良好	やや不良	庄内系
66	土師器 甕	①(15.2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	不良	やや不良	庄内系
67	土師器 甕	①(16.9)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	不良	やや不良	庄内系
68	土師器 甕	①(18.8)	①黒色(7.5YR2/1) ②明褐色(7.5YR7/2)	良好	良好	庄内系
69	土師器 甕		①黒色(7.5YR2/1) ②明褐色(7.5YR7/2)	良好	良好	庄内系 68と同一個体
70	土師器 甕		①褐色(7.5YR4/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	布留系?
71	土師器 小型丸底壺	①(7.3)	灰白色(7.5YR7/2)	良好	良好	
72	土師器 小型丸底壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
73	土師器 小型丸底壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②黒色(10YR1.7/1)	良好	良好	
74	土師器 小型丸底壺		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	良好	
75	土師器 小型丸底壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
76	土師器 高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
77	土師器 高坏		①橙色(5YR7/8) ②にぶい橙色(5YR7/4)	やや不良	良好	
78	土師器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	やや不良	
79	土師器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
80	土師器 高坏		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)	良好	やや不良	
81	土師器 高坏		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
82	土師器 高坏		浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
83	土師器 高坏	②(13.3)	①浅黄褐色(7.5YR8/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	精良	
84	土師器 高坏	②(16.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	やや不良	
85	土師器 壺or台付鉢		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
86	手捏土器 鉢	①(8.7)②2.5③5.8	褐灰色(10YR6/1)	良好	やや不良	
A区 第6層 (Fig. 14~17)						
87	縄文土器 浅鉢		灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	不良	粗製
88	縄文土器 不明		褐灰色(5YR4/1)	良好	不良	粗製
89	縄文土器 甕	②(4.6)	①暗赤褐色(5YR3/3) ②黒色(5YR1.7/1)	やや不良	不良	粗製
90	弥生土器 壺	①(26.8)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	良好	良好	
91	弥生土器 壺	①(22.6)	浅黄橙色(10YR8/4)	不良	やや不良	複合口縁
92	弥生土器 壺	①(30.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	複合口縁
93	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	不良	複合口縁
94	弥生土器 壺		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰白色(10YR7/1)	良好	不良	
95	弥生土器 壺		①橙色(5YR7/6) ②橙色(5YR6/6)	やや不良	やや不良	
96	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/4)	不良	やや不良	
97	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR6/3)	やや不良	やや不良	
98	弥生土器 壺	②(5.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	やや不良	
99	弥生土器 壺	②(2.9)	①浅黄褐色(7.5YR8/3) ②黒褐色(7.5YR2/2)	良好	やや不良	
100	弥生土器 壺	②(4.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
101	弥生土器 壺	②2.7~1.9(楕円形)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	やや不良	
102	弥生土器 壺	①(14.0)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/3)	良好	やや不良	
103	弥生土器 甕	①(19.8)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
104	弥生土器 甕	①(13.3)	浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
105	弥生土器 甕		浅黄褐色(7.5YR8/6)	やや不良	良好	
106	弥生土器 甕	①(9.6)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	やや不良	
107	弥生土器 器台付鉢		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	良好	
108	弥生土器 器台		浅黄褐色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
109	弥生土器 器台	②(9.0)	浅黄褐色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
110	弥生土器 器台		浅黄褐色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
111	弥生土器 高坏		橙色(7.5YR6/6)	やや不良	不良	
112	弥生土器 高坏	①(27.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色 調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
113	弥生土器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
114	弥生土器 鉢	①(14.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	不 良	やや不良	
115	土師器 壺	①(15.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
116	土師器 壺		にぶい黄橙色(10YR8/4)	良 好	やや不良	
117	土師器 甕		①赤灰色(2.5YR4/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
118	土師器 甕	①(11.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良 好	良 好	
119	土師器 甕	①(15.8)	橙色(5YR7/6)	良 好	良 好	
120	土師器 甕	①(16.2)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
121	土師器 甕	①(16.0)	①黒色(7.5YR1.7/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良 好	やや不良	
122	土師器 甕	①(17.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良 好	やや不良	
123	土師器 甕	①(17.4)	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②橙色(5YR7/6)	良 好	良 好	
124	土師器 甕	①(15.5)	黄橙色(7.5YR8/8)	良 好	良 好	
125	土師器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良 好	良 好	
126	土師器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
127	土師器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
128	土師器 小型丸底壺	①(8.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	やや不良	
129	土師器 小型丸底壺	①(10.1)	浅黄橙色(10YR8/4)	良 好	良 好	
130	土師器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良 好	良 好	
131	土師器 甕		灰黄褐色(10YR6/2)	良 好	良 好	山陰系
132	土師器 甕		①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(5YR5/1)	良 好	良 好	山陰系
133	土師器 甕	①(16.3)	①橙色(2.5YR7/6) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	良 好	山陰系
134	土師器 甕	①(15.2)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	不 良	山陰系
135	土師器 甕	①(14.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい褐色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	庄内系
136	土師器 高坏		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良 好	良 好	
137	土師器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
138	土師器 高坏		浅黄橙色(7.5YR8/6)	良 好	良 好	
139	土師器 高坏		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良 好	良 好	
140	土師器 高坏	②(15.0)	にぶい褐色(5Y7/4)	良 好	良 好	
141	土師器 高坏	②(15.1)	にぶい褐色(7.5YR7/3)	良 好	良 好	
A区 第8層 (Fig. 18)						
142	縄文土器 浅鉢		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良 好	精 良	精製
143	縄文土器 浅鉢		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良 好	良 好	精製
144	縄文土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良 好	やや不良	粗製
145	縄文土器 深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良 好	やや不良	粗製
146	縄文土器 深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良 好	やや不良	粗製
147	縄文土器 深鉢		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②黒色(7.5YR1.7/1)	良 好	やや不良	粗製
148	縄文土器 深鉢		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良 好	やや不良	粗製
149	縄文土器 深鉢		①黒褐色(7.5YR3/1) ②黒色(7.5YR1.7/1)	良 好	やや不良	粗製

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
150	縄文土器 甕		①灰白色(10YR8/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)	良好	やや不良	粗製
151	縄文土器 深鉢		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黒褐色(7.5YR3/1)	やや不良	不良	粗製
152	縄文土器 深鉢		①黒褐色(7.5YR2/2) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや不良	不良	粗製
153	縄文土器 深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良好	やや不良	粗製
154	縄文土器 深鉢		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒褐色(10YR3/1)	良好	やや不良	粗製
A区 第10層 (Fig. 19)						
155	縄文土器 浅鉢		①灰褐色(7.5YR6/6) ②褐灰色(10YR4/1)	良好	良好	精製
156	縄文土器 甕or深鉢		褐灰色(7.5YR4/1)	良好	不良	粗製
157	縄文土器 甕or深鉢		①灰白色(2.5YR8/2) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	やや不良	粗製
A区 第13層 (Fig. 19)						
158	縄文土器 甕or深鉢		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良好	やや不良	粗製
159	縄文土器 甕or深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良好	良好	粗製
160	縄文土器 甕or深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	やや不良	粗製
A区 第15層 (Fig. 20)						
161	縄文土器 浅鉢	①(11.6)	①浅黄褐色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良好	不良	精製
162	縄文土器 浅鉢		浅黄色(2.5Y8/4)	良好	良好	精製
163	縄文土器 甕		①にぶい黄褐色(10YR7/2) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	良好	精良	精製
164	縄文土器 甕		褐灰色(10YR6/1)	やや不良	やや不良	粗製
165	縄文土器 甕		①にぶい黄褐色(10YR7/2) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	良好	良好	粗製
166	縄文土器 甕		①にぶい褐色(7.5YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不良	粗製
167	縄文土器 甕or深鉢		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②黒褐色(10YR3/1)	やや不良	不良	粗製
168	縄文土器 甕or深鉢		①灰白色(10YR8/2) ②黒褐色(7.5YR3/1)	良好	やや不良	粗製
169	縄文土器 甕or深鉢		①浅黄褐色(10YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	やや不良	粗製
A区 攪乱層・排土 (Fig. 21)						
170	弥生土器 壺		①灰白色(2.5Y3/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)	良好	良好	排土から出土
171	弥生土器 壺		①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	やや不良	排土から出土
172	土師器 甕	①(16.9)	①黒褐色(10YR3/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	排土から出土 山陰系
173	土師器 甕		①灰白色(7.5YR8/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	攪乱層出土 山陰系
B区 (Fig. 22・23)						
174	縄文土器 深鉢		①灰褐色(7.5YR6/2) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	やや不良	粗製
175	縄文土器 深鉢		①浅黄褐色(10YR8/4) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	不良	粗製
176	縄文土器 深鉢		①灰褐色(5YR6/2) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	やや不良	粗製
177	縄文土器 甕		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②褐灰色(7.5YR6/1)	良好	不良	粗製
178	縄文土器 甕or深鉢		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不良	粗製
179	縄文土器 甕	②(6.5)	浅黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	粗製
180	縄文土器 甕	②6.7	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	良好	不良	粗製
181	弥生土器 甕		浅黄褐色(7.5YR8/4)	良好	良好	複合口縁
182	弥生土器 甕		浅黄褐色(10YR8/4)	良好	やや不良	複合口縁

出土遺物観察表

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
183	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	良好	複合口縁
184	弥生土器 壺	①(18.7)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良好	良好	複合口縁
185	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	やや不良	
186	弥生土器 壺	②(6.2)	①明褐色(7.5YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	やや不良	
187	弥生土器 壺	②(4.2)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	不良	
188	弥生土器 長頸壺	①(9.0)	①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/3)	良好	良好	
189	弥生土器 甕		橙色(5YR7/8)	良好	良好	跳ね上げ口縁
190	弥生土器 高坏		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	やや不良	
191	弥生土器 不明	②(10.4)	①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)	良好	良好	
192	土師器 甕	①(21.1)	①褐灰色(7.5YR4/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
193	土師器 甕		①黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	良好	
194	土師器 甕		①黒褐色(10YR3/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
195	土師器 甕	①(14.9)	①黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
196	土師器 甕	①(10.9)	①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	良好	
197	土師器 甕		①褐灰色(7.5YR6/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良好	やや不良	
198	土師器 甕		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	不良	布留系
199	土師器 甕	①(13.5)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	やや不良	山陰系
200	土師器 甕		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	やや不良	山陰系 199と同一個体
201	土師器 高坏	①(16.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良好	良好	畿内系
202	土師器 高坏		①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	やや不良	良好	
203	土師器 直口壺or小型丸底壺	①(8.9)	灰白色(10YR8/1)	良好	良好	
204	土師器 鉢		①橙色(5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	良好	
205	土師器 台付鉢		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	不良	
206	手捏土器 甕	②1.5~2.0(楕円形)	灰黄色(2.5Y7/2)	良好	良好	
207	手捏土器 壺		橙色(5YR7/6)	やや不良	良好	
208	土師器 皿	②5.9	①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②浅黄褐色(10YR8/4)	良好	良好	
209	土師質土器 足鍋		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	やや不良	
C区 (Fig. 24)						
210	土師器 甕		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②にぶい褐色(5YR7/3)	良好	良好	第22b層出土
211	土師器 甕		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	第22b層出土
212	土師器 皿		淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	第22b層出土 大内氏館跡B式土師器
213	弥生土器 甕		にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	やや不良	表土層から出土
214	瓦質土器 足鍋		黄灰色(2.5Y6/1)	良好	良好	表土層から出土
215	土師質土器 火鉢		①上黒褐色(2.5Y3/1)下浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	良好	表土層から出土
216	瓦質土器 播鉢		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰色(7.5Y4/1)	良好	良好	表土層から出土
217	土師質土器 播鉢		①褐灰色(10YR6/1) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	良好	表土層から出土

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

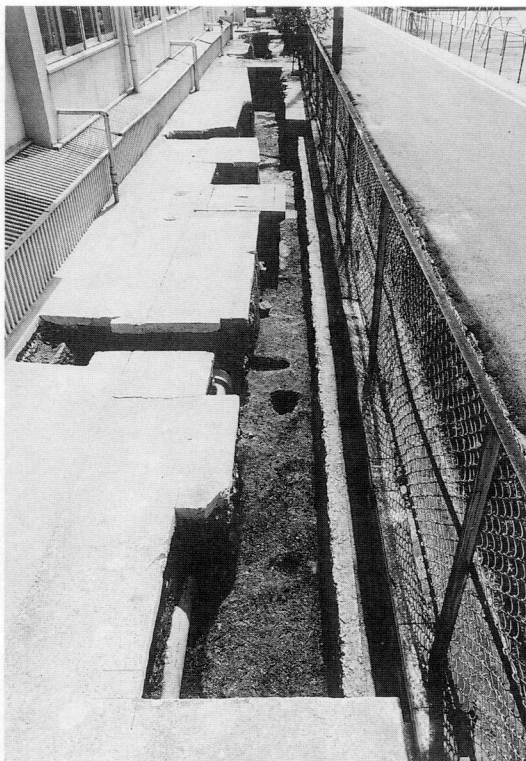
法量 () は復原値

番号	器 種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 質	備 考
A区 第6層							
224	縦 長 剥 片	(18.5)	(16.0)	(4.5)	0.79	姫島産黒曜石	
233	粗製扁平打製石斧	91.5	53.5	16.5	99.20	結晶片岩	
A区 第7a層							
218	石 鏃	(33.0)	19.5	5.0	2.08	サヌカイト	
237	敲打痕のある円礫	51.5	45.0	17.5	56.92		河原石
A区 第8層							
221	二次加工のある剥片	(14.0)	(16.0)	(4.0)	0.77	サヌカイト	
238	敲打痕のある円礫の素材	50.0	44.0	24.0	75.93		河原石
239	敲打痕のある円礫	40.0	35.5	23.0	45.29		河原石
A区 第10層							
220	二次加工のある剥片	(20.5)	(17.5)	(3.5)	0.77	サヌカイト	
223	調 整 剥 片	17.0	11.0	2.0	0.25	腰岳産黒曜石	
228	剥 片	(11.0)	(23.0)	(3.0)	0.52	サヌカイト	
A区 第11a層							
236	粗製扁平打製石斧	(129.0)	(58.0)	(14.5)	137.03	結晶片岩	
A区 第13層							
219	石 鏃	(22.5)	(19.0)	(5.5)	2.06	サヌカイト	
222	使用痕のある剥片	37.0	19.0	9.0	4.41	腰岳産黒曜石	
225	剥 片	(11.5)	(12.0)	(2.5)	0.23	淀姫産黒曜石	
226	剥 片	15.0	14.0	3.0	0.49	サヌカイト	
227	剥 片	(9.0)	(10.0)	(2.5)	0.13	腰岳産黒曜石	
234	粗製扁平打製石斧	(142.0)	(59.0)	(16.0)	147.47	結晶片岩	
A区 第15層							
229	剥 片	(14.0)	17.5	2.0	0.34	サヌカイト	
230	剥 片	(20.0)	27.0	5.5	1.83	サヌカイト	
231	剥 片	(11.5)	(10.0)	(2.5)	0.20	腰岳産黒曜石	
232	剥 片	15.0	11.5	5.0	0.54	腰岳産黒曜石	
235	粗製扁平打製石斧	(102.5)	(51.0)	(14.5)	94.35	結晶片岩	
B区 第6層							
241	砥 石	(66.5)	(94.5)	(13.5)	88.02	結晶質凝灰岩	
C区 表土							
240	砥 石	(76.5)	(48.5)	(14.5)	96.29	石英斑岩	

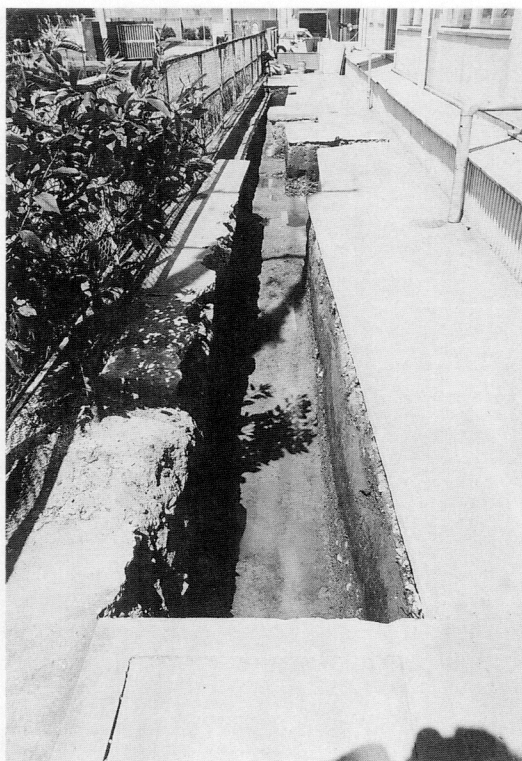


亀山構内（教育学部附属山口中学校）全景（南東から）

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

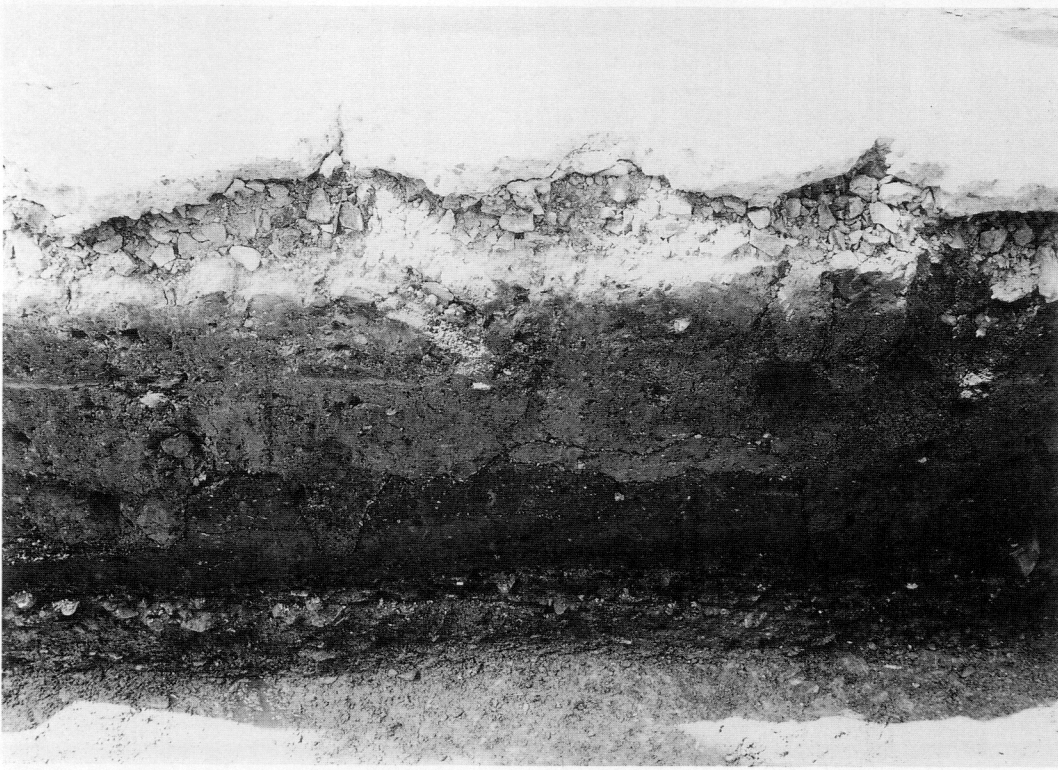


(1) A区完掘状況（北西から）

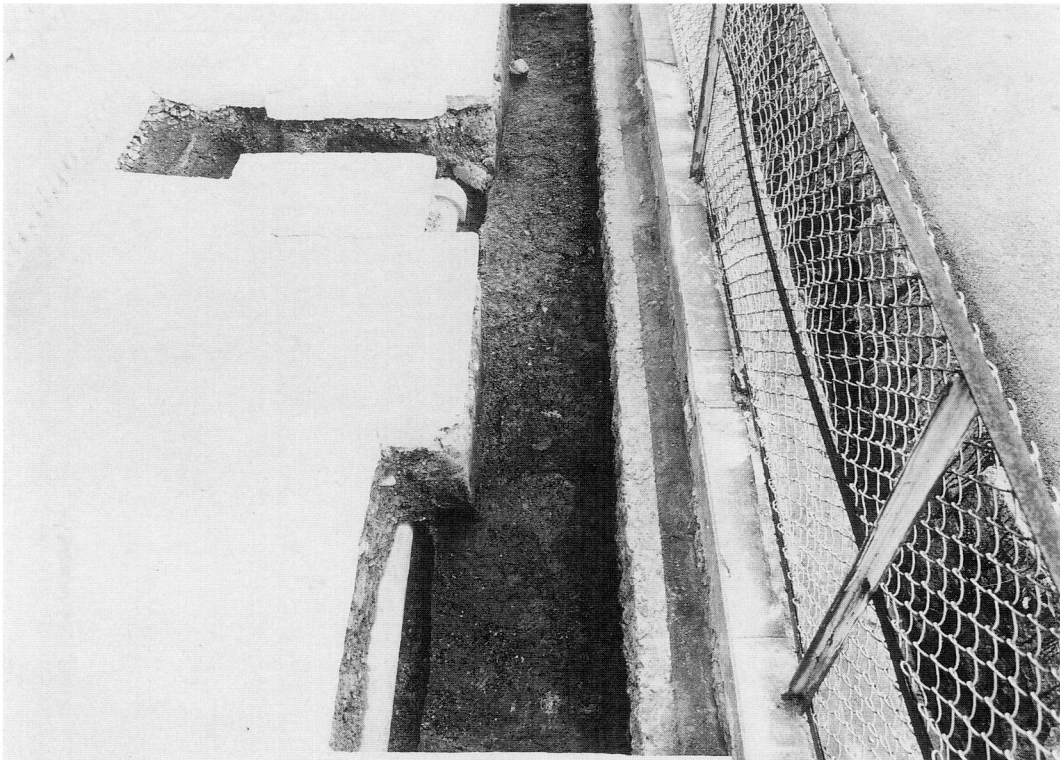


(2) A区完掘状況（南東から）

(1)



(3) A区西壁中央部土層断面（東から）



(1) 第1号溝状遺構検出状況（北西から）



(2)

(2) 第1号溝状遺構完掘状況（北西から）

亀山構内教育学部附属山口中学校污水排水管布設に伴う発掘調査



(1) A区第6層遺物出土状況（東から）

(3)



(2) A区第8層遺物出土状況（西から）



(1) B区発掘状況(北西から)



(2) C区発掘状況(北西から)

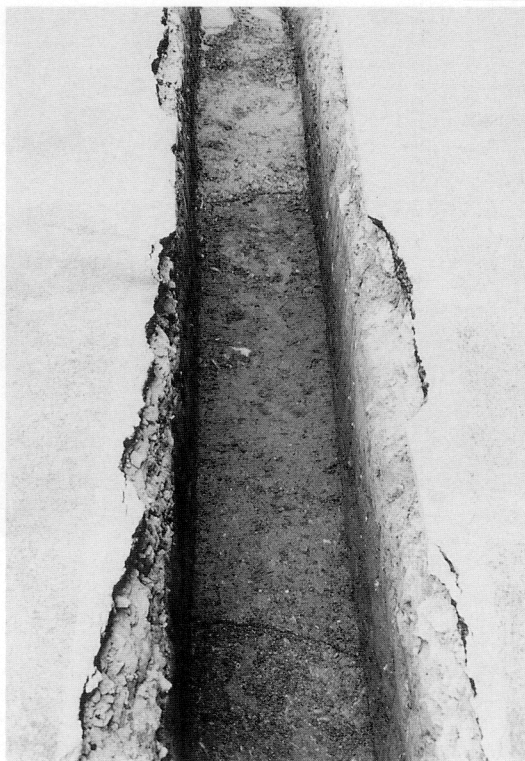
(4)

亀山構内教育学部附属山口中学校校污水排水管布設に伴う発掘調査

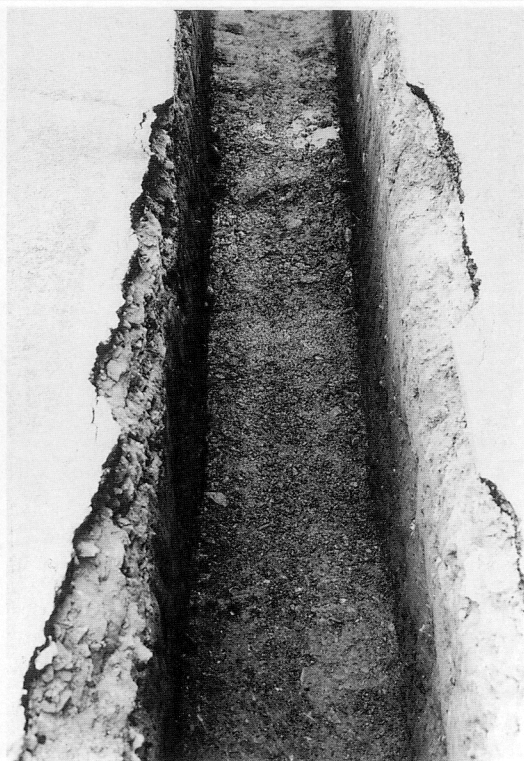


(1) D区完掘状況 (極東から)

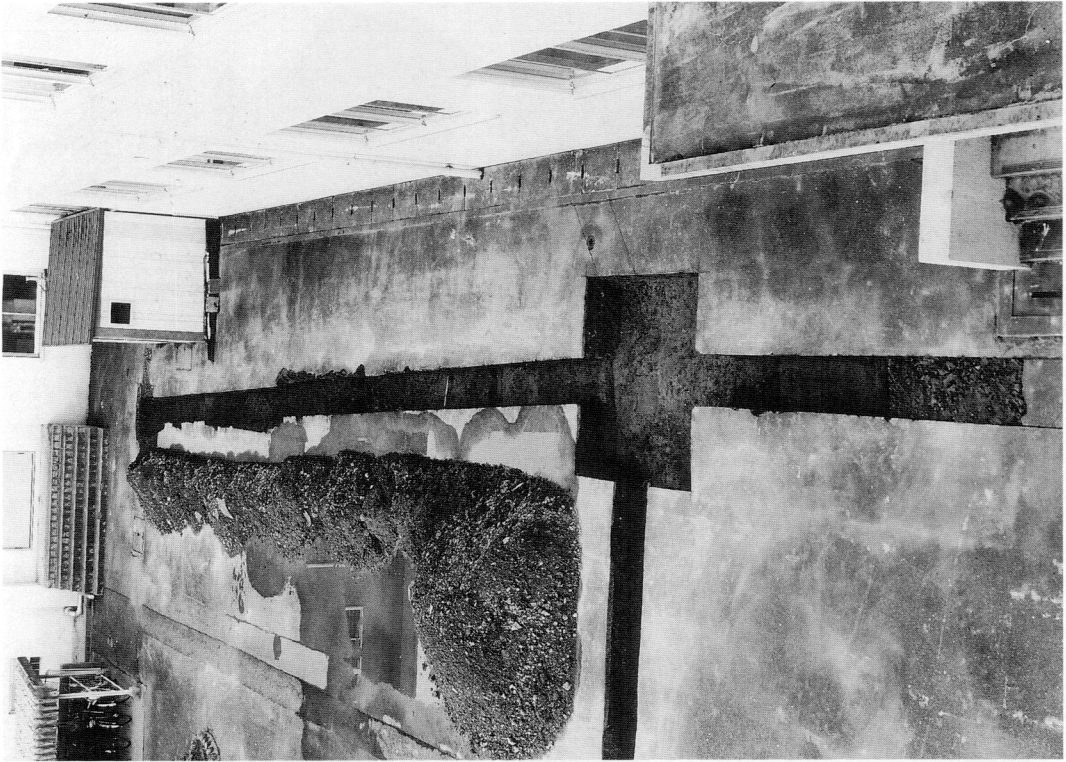
(5)



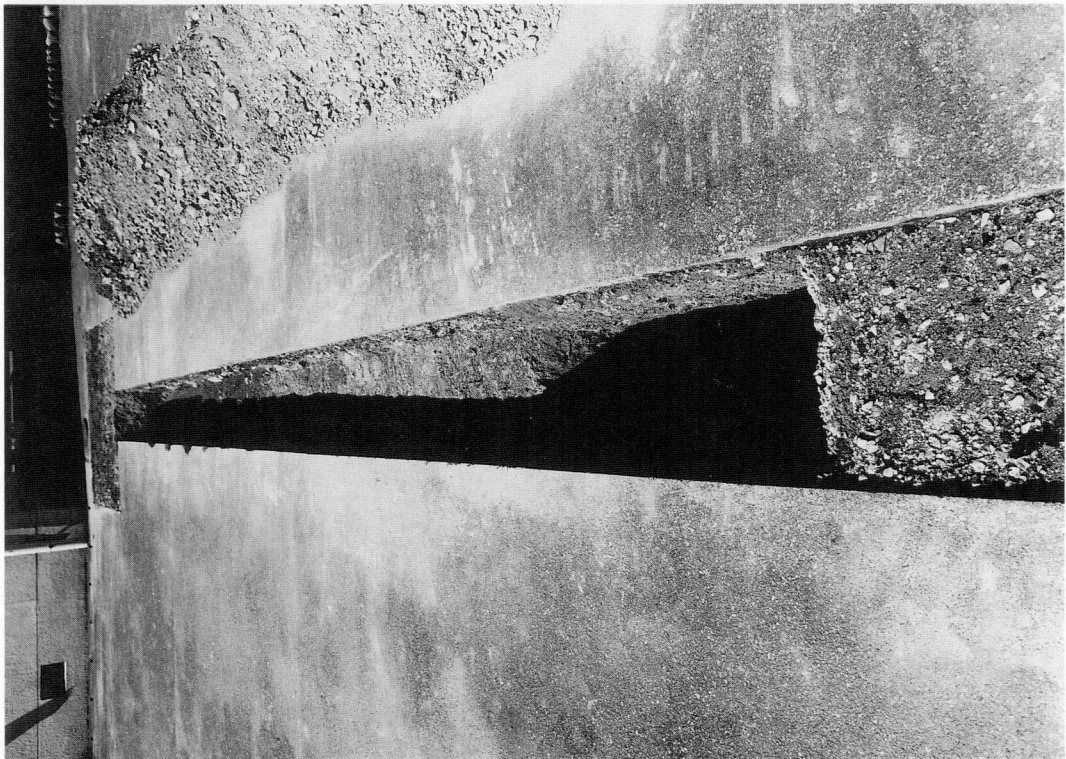
(2) 第2号溝状遺構検出状況 (北西から)



(3) 第2号溝状遺構完掘状況 (北西から)

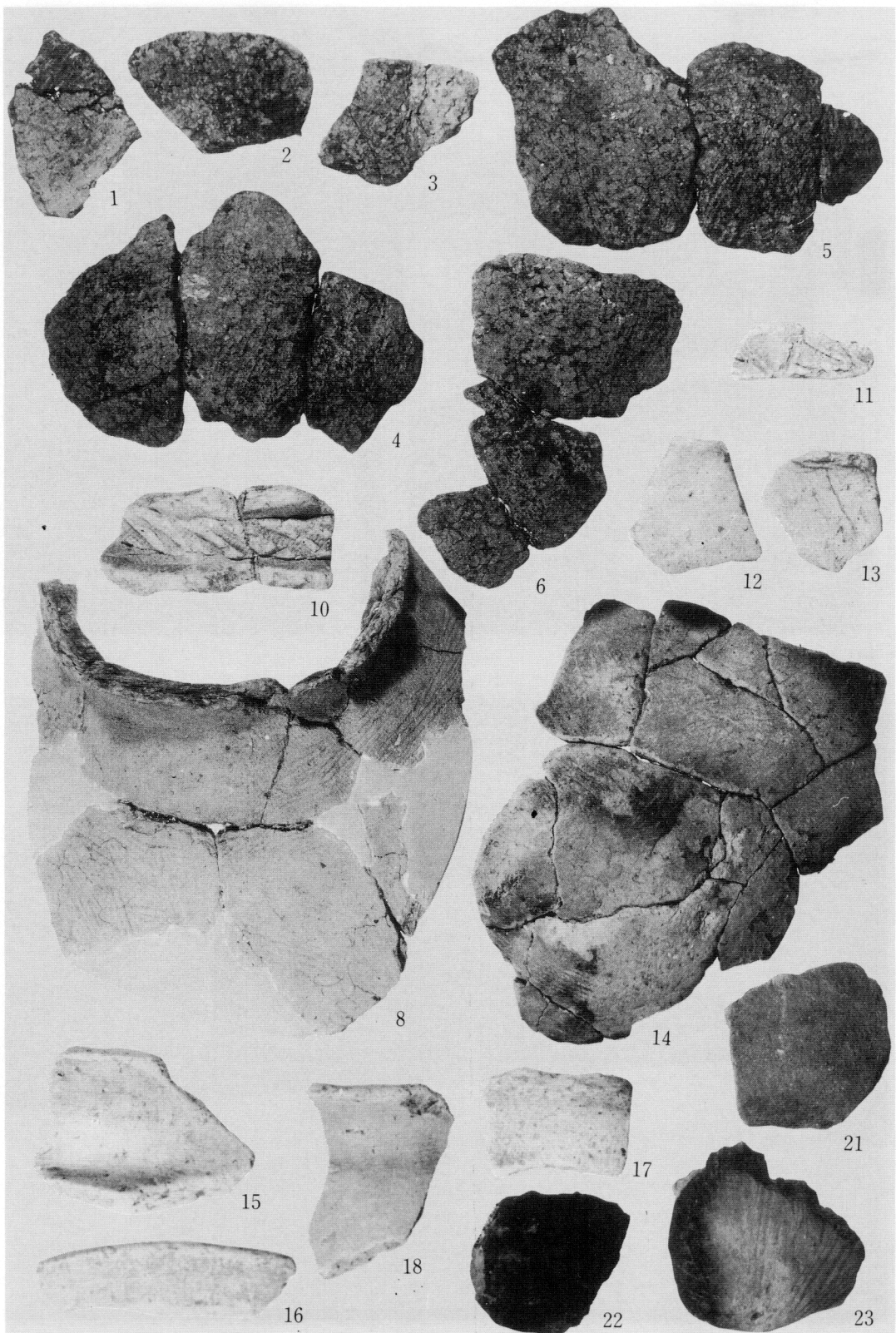


(1) E区完掘状況(南西から)



(2) F区完掘状況(南東から)

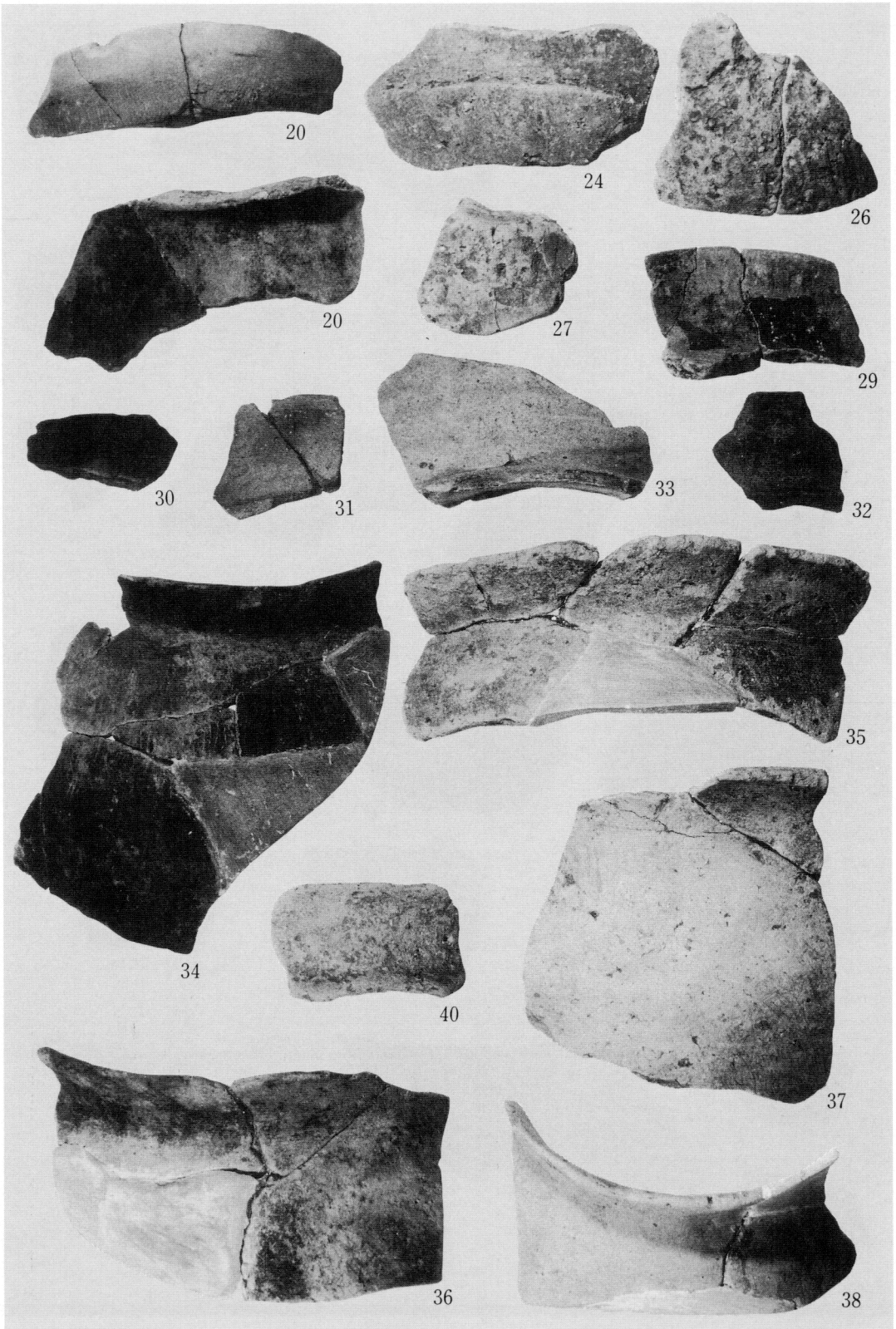
亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (7)



出土遺物 (1)

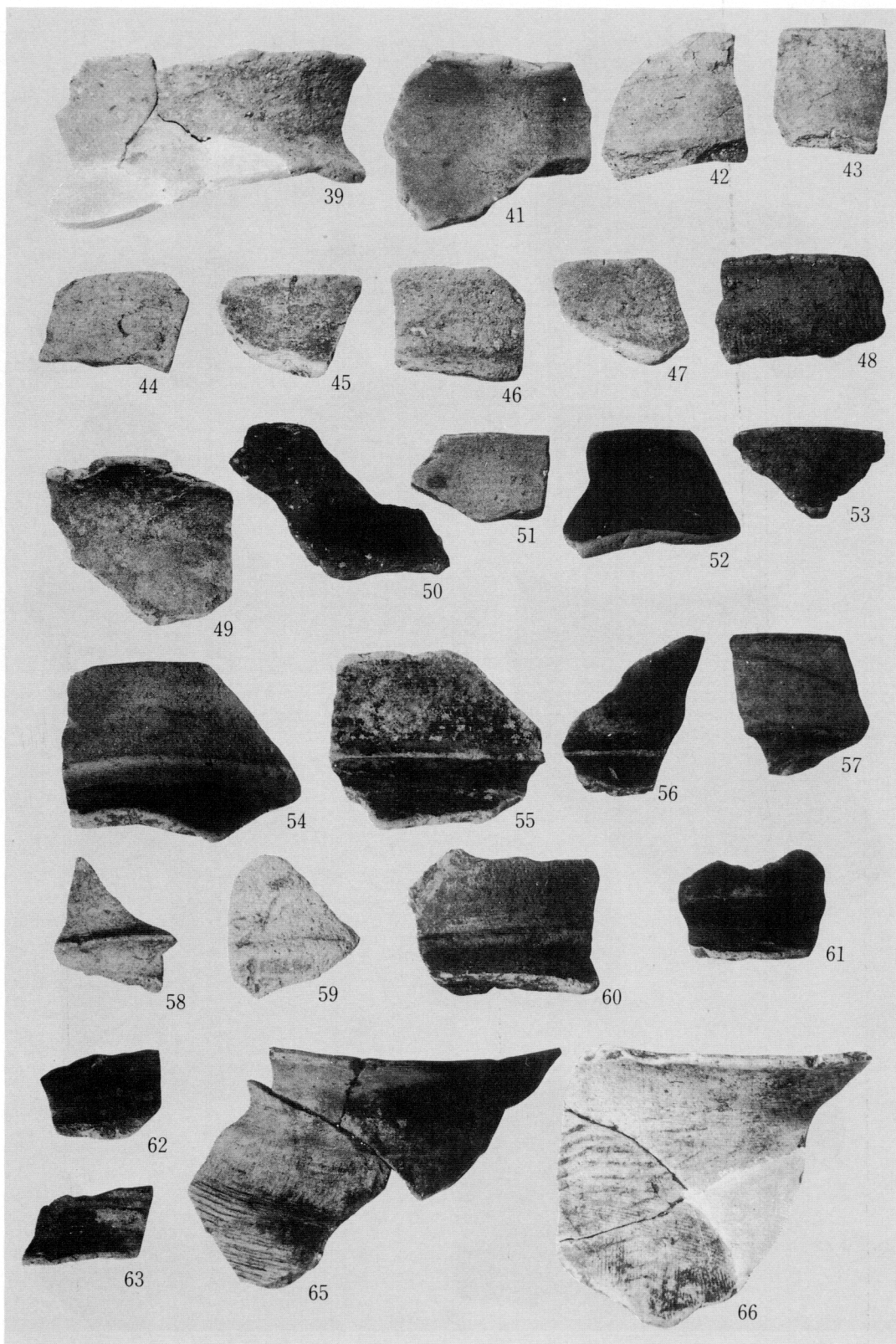
約 1 : 2

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (8)



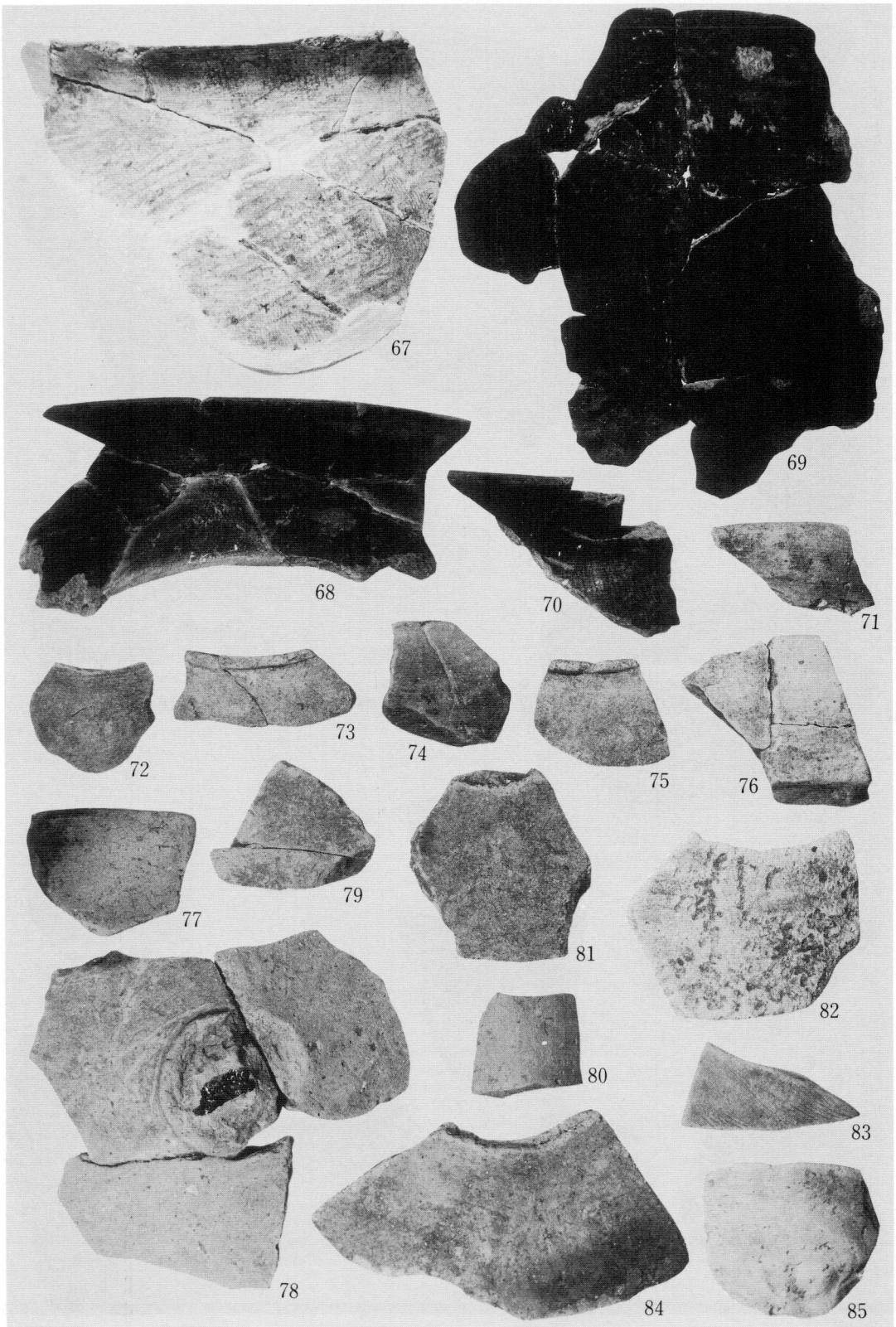
出土遺物 (2)

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (9)



出土遺物 (3)

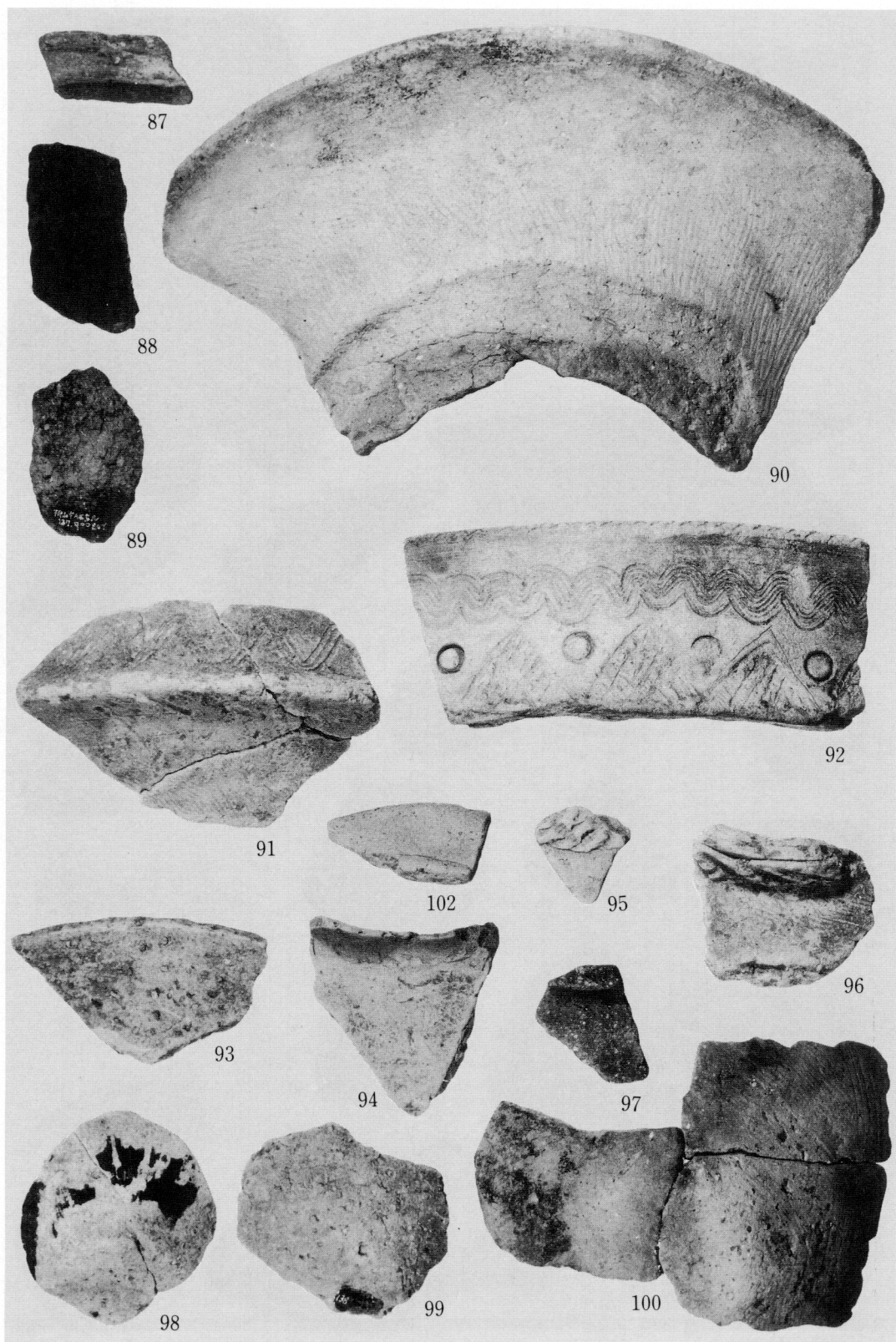
約 1 : 2



出土遺物 (4)

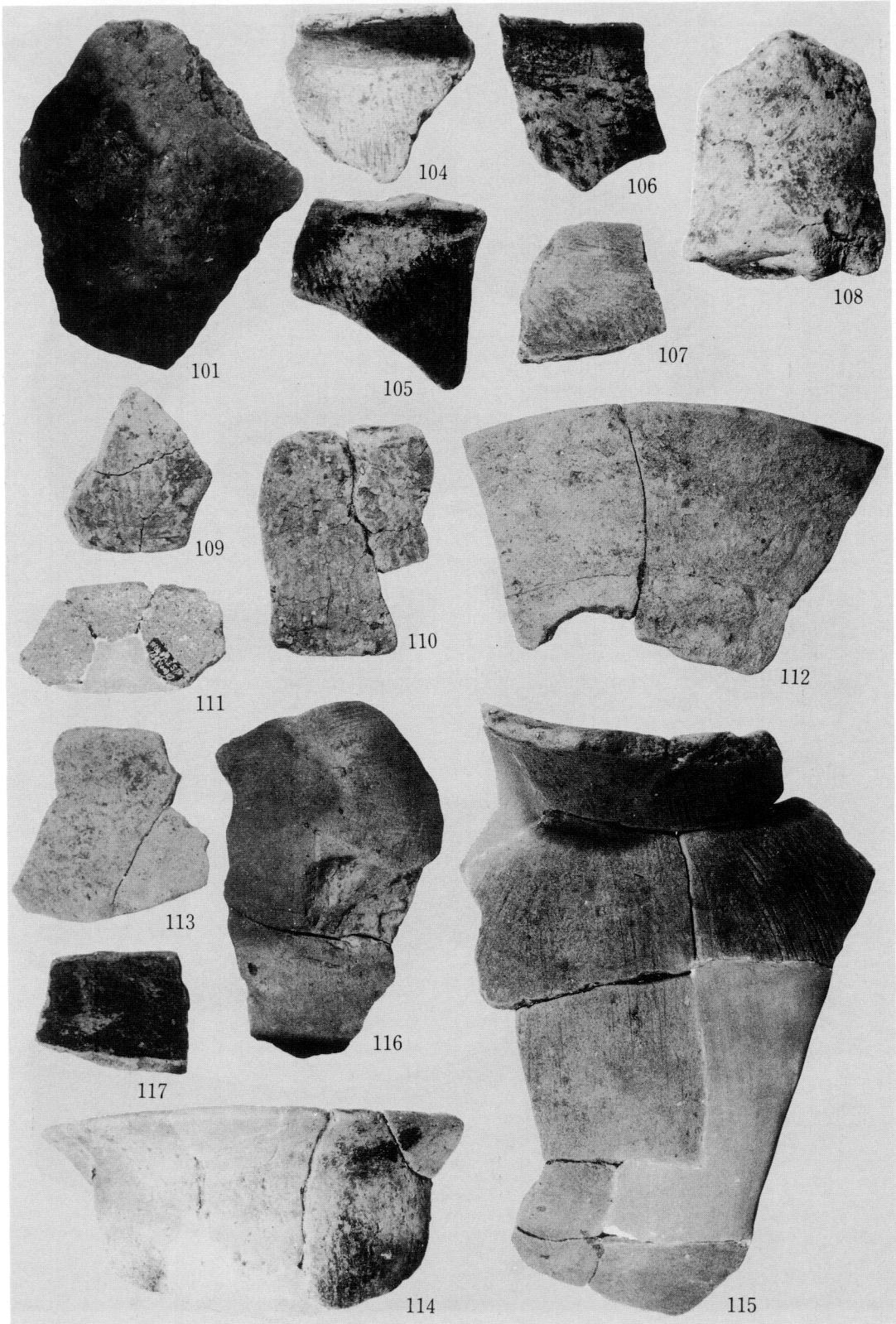
約 1 : 2

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (11)



出土遺物 (5)

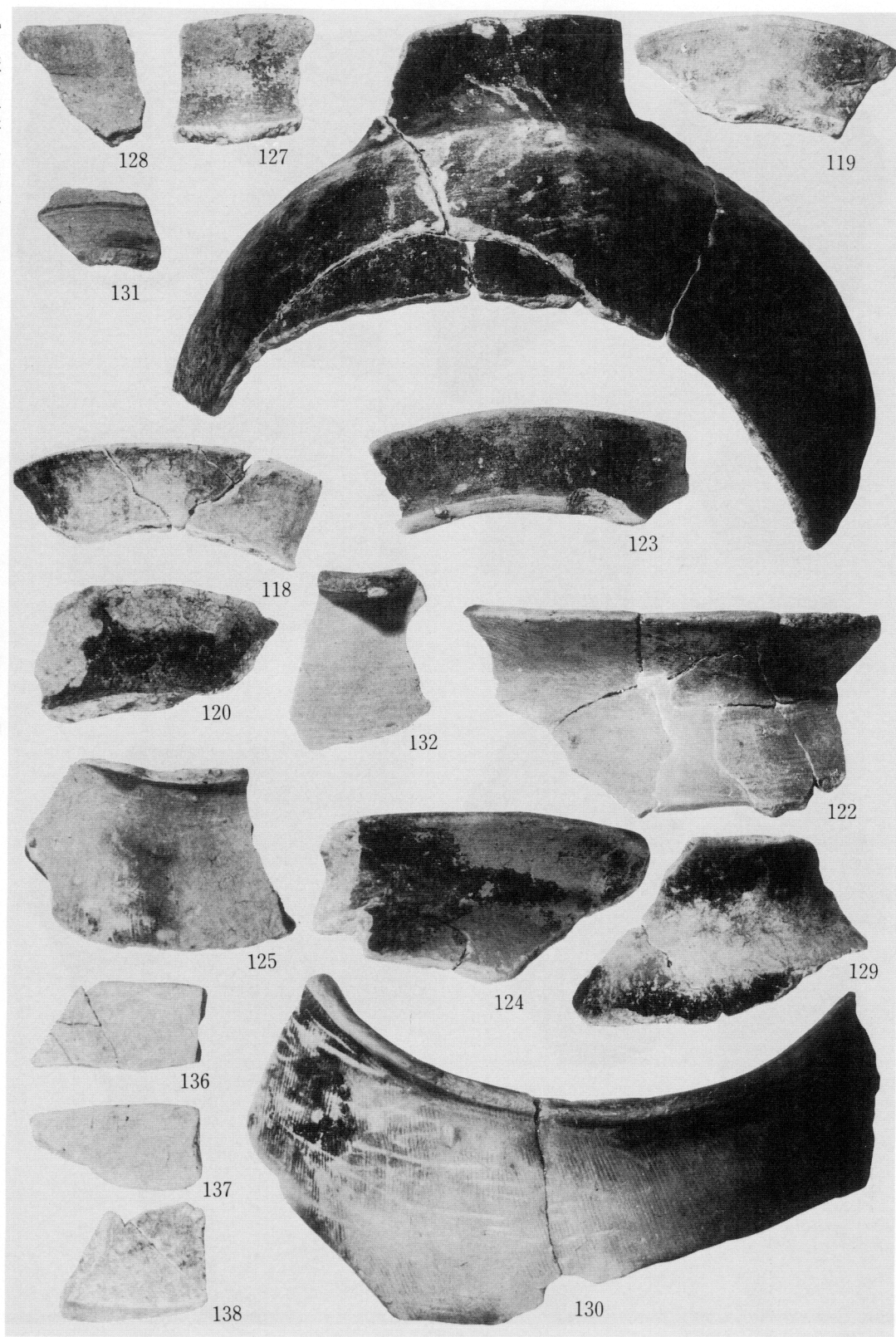
亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (12)



出土遺物 (6)

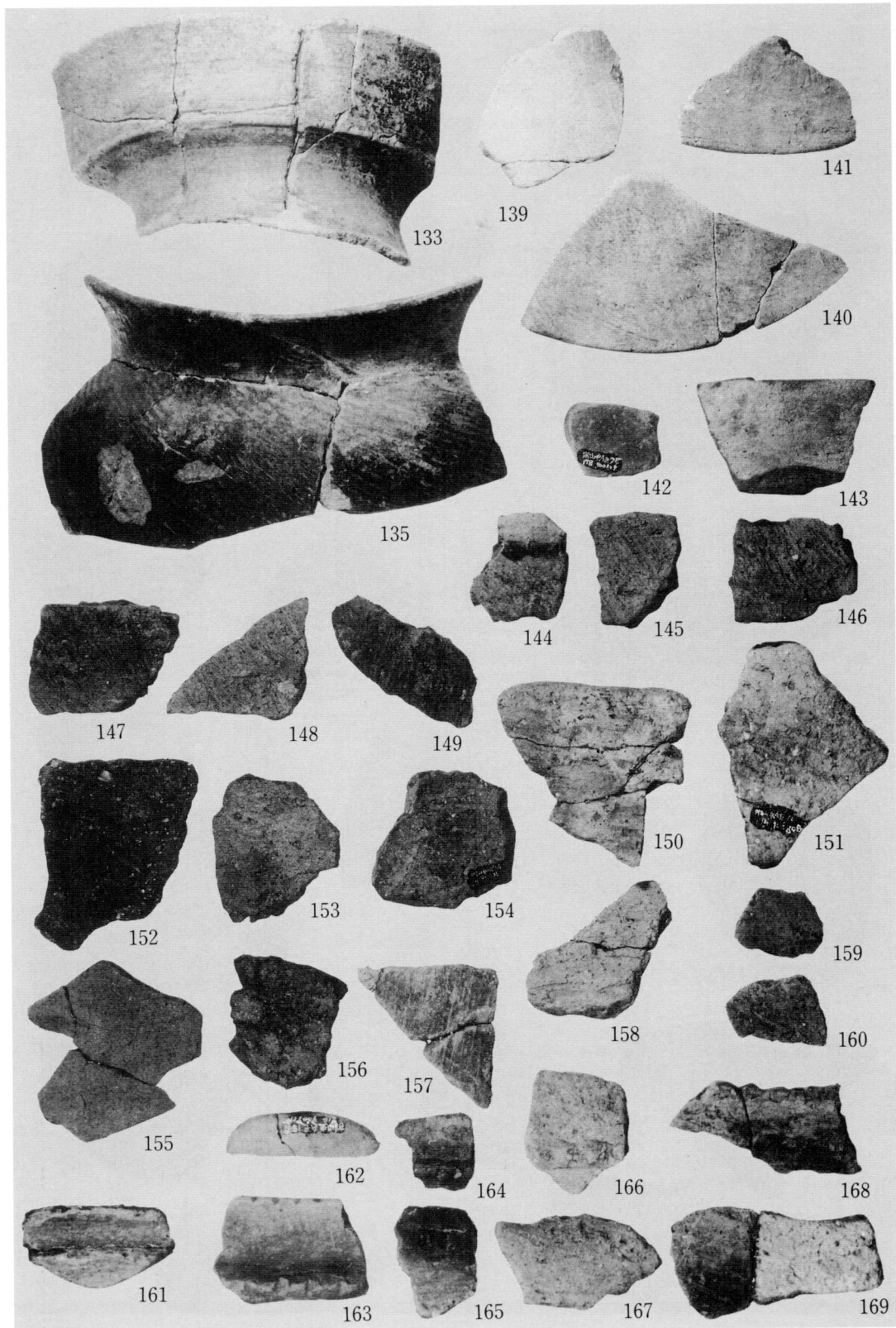
約 1 : 2

亀山構内教育学部附属山口中学校污水排水管布設に伴う発掘調査
(13)



出土遺物 (7)

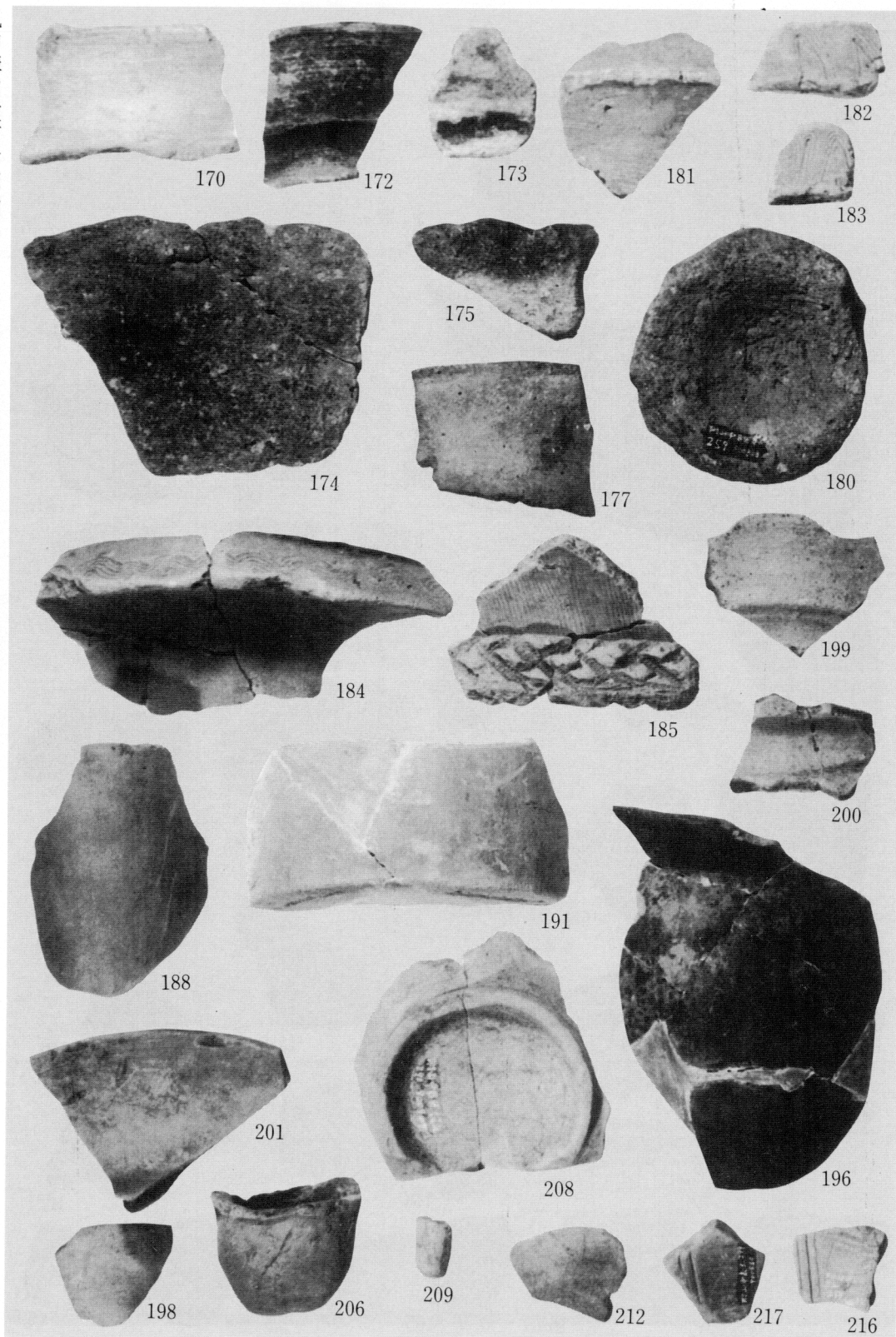
亀山構内教育学部附属山口中学校污水排水管布設に伴う発掘調査 (14)



出土遺物 (8)

約 1 : 2

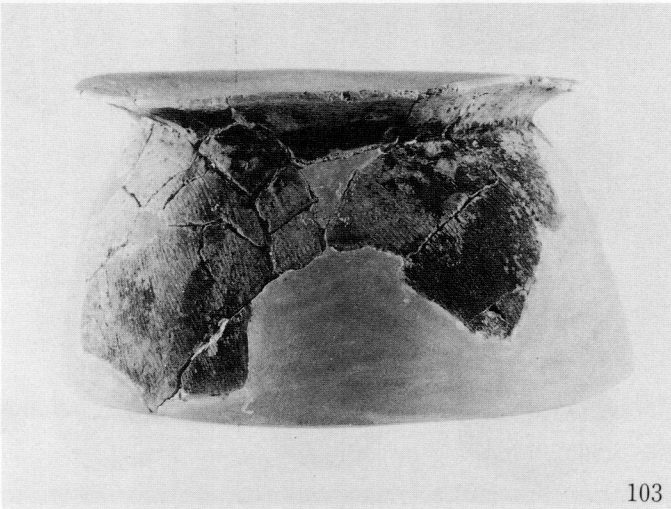
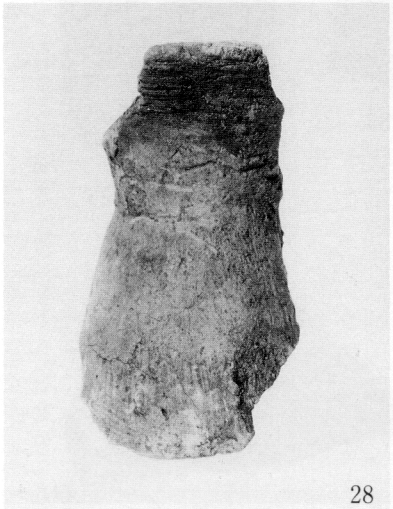
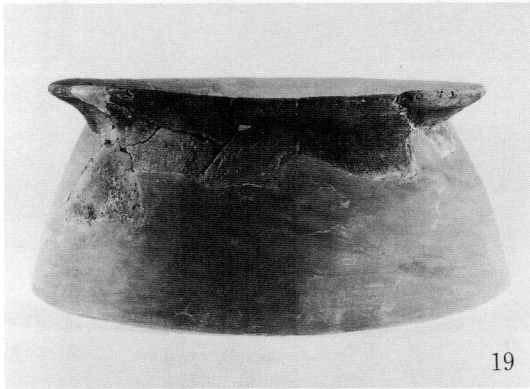
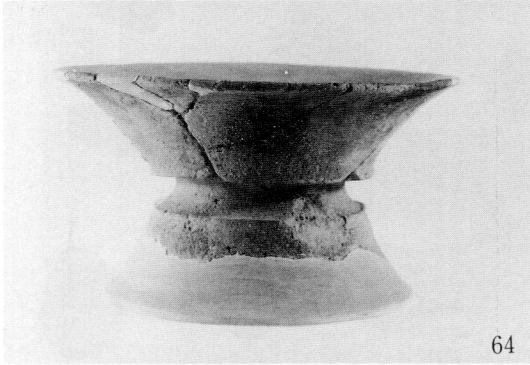
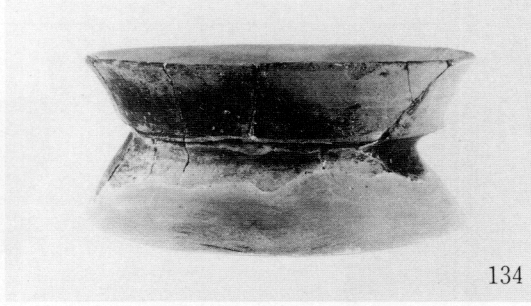
亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (15)



出土遺物 (9)

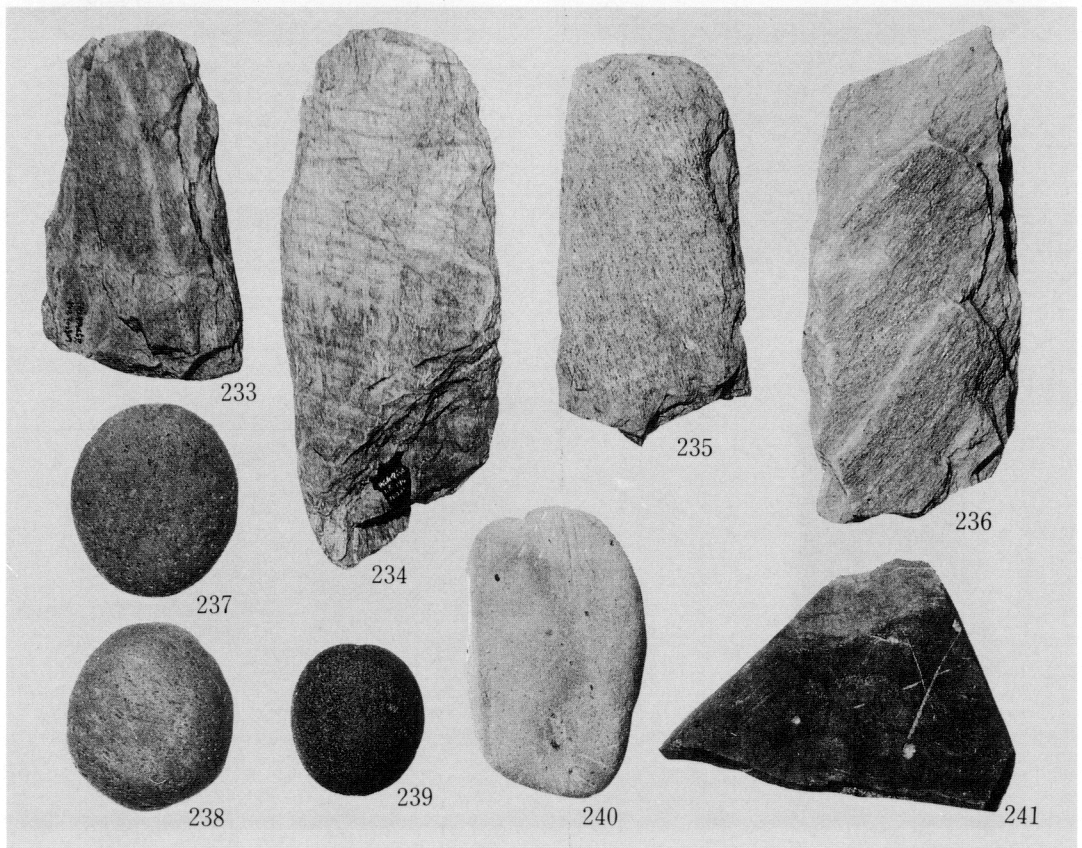
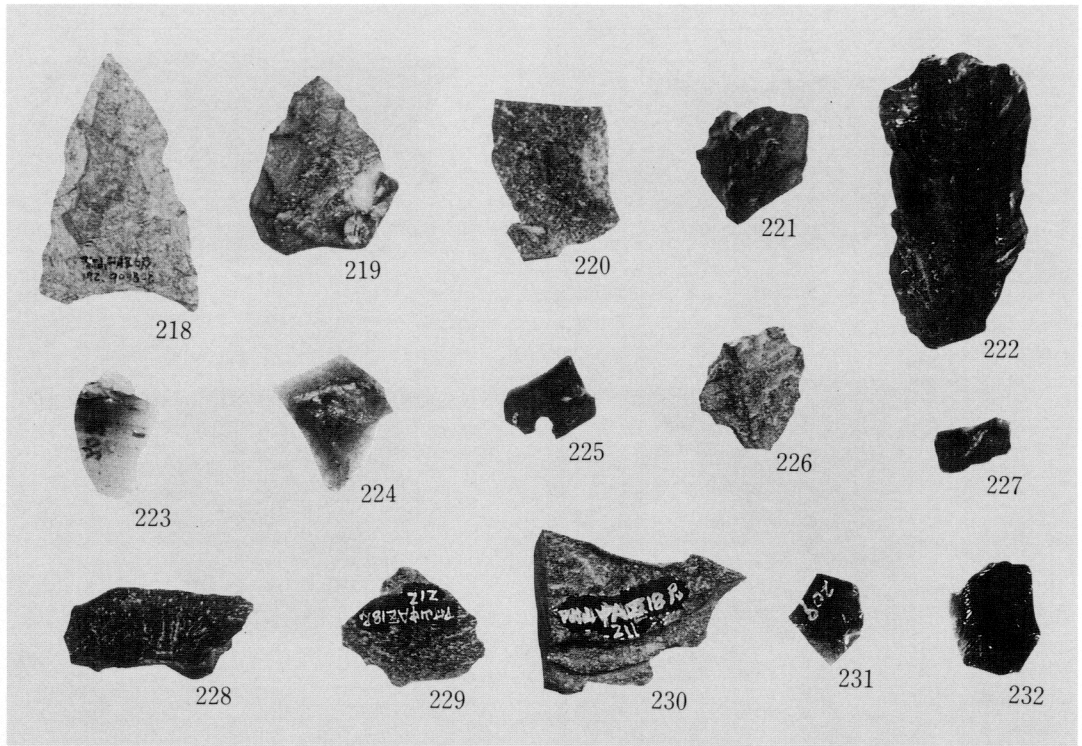
約 1 : 2

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (16)



出土遺物 (10) 25・86…約1:2, 64…約1:4, 19…約1:5, その他…約1:3

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 (17)



出土遺物 (11)

218~232...約 1 : 1, 233~241...約 1 : 2